

# 「高松宮家伝来禁裏本」の形成過程

小倉慈司

A Study on the Constructing Process of the Takamatsu-no-miya Library Collection

OGURA Shigeji

はしがき

- ① 後西院から靈元天皇への進上
- ② 後西上皇崩御後の蔵書の行方
- ③ 幸仁親王への分与
- ④ 後西天皇の書籍収集の目的
- ⑤ 靈元天皇による後西上皇旧蔵書の管理
- ⑥ 靈元法皇から中御門天皇・職仁親王への蔵書の移動  
むすび

## 【論文要旨】

近世前期に諸善本の副本作成事業や古写本収集を行なった後西天皇の収集書について、それが靈元天皇を経て、中御門天皇と有栖川宮職仁親王に引き継がれていく過程を明らかにする。寛文六年に後水尾法皇の命を承けて後西上皇が靈元天皇に諸記録新写本を七〇合進したが、その中には古写本や文学書は含まれておらず、上皇の手許に残された。それらも含めた後西上皇蔵書は、貞享二年の上皇崩御後に靈元天皇が接収し、さらに再整理を行なって自らの蔵書中に組み込んだ。なお、後西上皇は蔵書の一部を皇子幸仁親王や近衛基熙に賜与している。後西天皇が禁裏本の副本作成作業を行なった理由について、従来は、禁裏の火災に備えるためと考えられていたが、実際には、讓位後も自分の手許に置くことができる蔵書を増やすためであったと考えられ、靈元天皇に進上した以外の書物については、最終的には一部を除いて幸仁親王（もしくは八条宮尚仁親王）に譲るつもりであったと考えられる。靈元天皇は後西上皇旧蔵

書を接収した後、史書については分類して寛文六年後西上皇進上本に加える作業を行なったが、完全にその作業が完了しないまま、讓位後五年を経て東山天皇に譲った（未整理部分は手許に残す）。しかしその後も必要に応じて禁裏より箱を戻して書物を取り返すこともあった。一方、文学書は讓位後もそのまま仙洞にて管理していた。靈元法皇崩御後には、中御門天皇へは、後西上皇旧蔵書中より分置された分や靈元天皇新収書も含めてかなりの量の史書・文学書が贈られているが、それらの中には他の皇子女に一旦形見分けされた後に中御門天皇に献上されたものも含まれていた。有栖川宮職仁親王に対しては、享保二一―一四年頃と崩御後の二度にわたって書籍が賜与されている。これらの書籍の中には靈元法皇が意図的に選別して職仁親王に贈ったものと、崩御後、偶然的要素によって職仁親王の手に渡ることになったものがあった。

【キーワード】 高松宮家伝来禁裏本、東山御文庫本、後西天皇、靈元天皇、書籍目録

## はしがき

写本研究の上で古写本が重視されることは言うまでもないが、近年、宮内庁書陵部所蔵御所本や東山御文庫本についての研究が進められる中で、近世の朝廷において書写された新写本に善写本が多く含まれていることが明らかになってきた。後西天皇や靈元天皇などの主導により書写されたそれらの写本は禁裏あるいは諸家に伝わっていた良質な写本を丁寧<sup>①</sup>に書写したものが多く、その後の諸事情によって親本が失なわれた場合等には大きな威力を発揮することとなる。そして本稿で検討対象とする「高松宮家伝来禁裏本」も、御所本や東山御文庫本と兄弟関係と云って良いほど密接な関係を持つ良質な蔵書群である。

この「高松宮家伝来禁裏本」と称されるコレクションは、一九八〇年に高松宮宣仁親王が国（文化庁）に寄託し、ついで文化庁より国立歴史民俗博物館へ寄託、さらに一九八七年の宣仁親王没後、親王の遺志に基づいて親王妃より国に寄贈され、文化庁を経て国立歴史民俗博物館に管理替されたものである。総点数は管理換當時において一六五九件（文化庁・国立歴史民俗博物館パンフレット「高松宮妃殿下御寄贈品特別陳列」一九八七年）と数えられ、それに先だって一九七九年から一九八二年にかけて国によって購入され、のちに国立歴史民俗博物館に管理換された史料も含めて、現在では、H一六〇〇の番号が付けられ、一九七一点と数えられている。なお、文化庁が高松宮より購入した史料の中には、「高松宮家伝来禁裏本」の移管以前に国立歴史民俗博物館に管理換されたために別番号で整理されているものも八点<sup>②</sup>ほどあり、これらを含めて「高松宮家伝来禁裏本」と呼ぶこともある。

「高松宮家伝来禁裏本」は当初、「高松宮禁裏本」と称され、一九八八年にいたって文化庁によって「高松宮家伝来禁裏本」と命名された。こ

の「高松宮家伝来禁裏本」について、寄贈当初に国立歴史民俗博物館で開催された「高松宮妃殿下御寄贈品特別陳列」（一九八七年一〇月六日～二五日）のパンフレットには次のように説明されている。

このたび、高松宮妃殿下から文化庁に寄贈された典籍類は、「高松宮禁裏本」と称せられる一六五九件に及ぶものである。

この禁裏本とは、近世初期に京都御所において蒐集・整理された宮中の文庫の典籍類の総称である。天下も平穩になった近世初頭、第一〇七代後陽成・第一〇八代後水尾以下歴代天皇によって、京都御所では伝来の典籍類の整理とともに、京都付近の諸社寺・諸公家の秘蔵する典籍類の書写・蒐集が盛んに行われた。特に第一一代後西・第一二代靈元天皇の時代にはその業が進み、御所の文庫は非常に充実したものとなった。その後も各種の典籍・史料類の収納が続き、これらを禁裏本と称し、今日まで伝来したのである。現在、その主体をなす二万八千余件のものは、京都御所東山御文庫本として京都御所内に保管され、勅封の扱いとなっている。

一方、近世初に創立された有栖川宮では、第三代を後西天皇皇子<sup>ゆきひと</sup>幸仁親王が、第五代を靈元天皇皇子<sup>よりひと</sup>職仁親王が継承されたが、その際、それぞれ禁裏本の一部の移譲を受けた。これらには有栖川宮に伝わり、さらに高松宮が有栖川宮の祭祀を受け継がれるに至って高松宮に帰し、今日まで大切に保存されて来たのであって、これが高松宮禁裏本であり、元来は京都御所の御文庫本と一体のものである<sup>③</sup>。

以上の説明は大きく見れば誤りではないが、幾つかの点において問題を抱えている。たとえば宮家継承の際に移譲を受けたとする点については現在では靈元天皇崩御後の形見分けを重視する見解がその後の定説となっており（註間等）、加えてさらに検討すべき余地も残されている。またその他の点において、現在課題とすべき問題点を箇条書きにしてみたい。

①「禁裏」とは天皇の御所を指す言葉であるから、「禁裏本」と称した場合、天皇の所蔵本ということになる。しかし実際には天皇が譲位後に書写・蒐集した史料も含まれていると考えられる。

②有栖川宮第三代幸仁親王が「禁裏本」の一部の移譲を受けたことについて、「高松宮家伝来禁裏本」の性格を考える上では、その時期がいつ、誰からであったかが問題となる。後西上皇の崩御時と考える見方が通説となっているが、必ずしも十分な証明はなされていない。

③「高松宮（家伝来）禁裏本」のすべてが後西天皇・靈元天皇旧蔵書というわけではない。

①の点は一見、細かいことのようにであるが、「高松宮家伝来禁裏本」の性格を解明する上では重要な問題である。現在も京都御所に伝わる東山御文庫本やその流れを汲む宮内庁書陵部所蔵御所本との差異を明らかにするためにないがしろにされるべきではない。

②は結論としては筆者も後西上皇より譲与されたと考えているが、可能性としては別の考え方も成り立ち得るので、検討を加える必要がある。

③は「高松宮家伝来禁裏本」の成り立ちに関わる問題でもある。

筆者はこれまで「高松宮家伝来禁裏本」（以下、必要に応じ高松宮本と略称する）について一つの論考（小倉（慈）a）および図録解説（小倉（慈）b）を執筆したことがある。前者は高松宮本の中でも史書を中心にして論じたものであったため、高松宮本全体を考える上では不十分な点があった。後者は前稿を踏まえつつも視野を広げて解説を試みたものであるが、一般読者を対象とした短文であったため意を尽くすことができず、また問題点のすべてを解決することはできなかった。

そこで本稿では、①②の点を中心に、後西天皇や靈元天皇の蔵書がどのようなにして有栖川宮に受け継がれたのかという問題を論じることしたい。③については全体像を明らかにするためには現在宮内庁書陵部にて整理中の有栖川宮本も含めて広く調査検討する必要がある、本稿では

必要に応じて触れるだけにとどめる（二部については小倉（慈）a bで論及した）。なお、以下に言及する史料には東山御文庫本・高松宮本が頻出するが、勅封番号を付したものが東山御文庫本、Hで始まる番号を付したものが高松宮本である。

## ①後西院から靈元天皇への進上

後西天皇は譲位以前より禁中や諸家に蔵される諸記録の複本作成に熱心に取り組み、多くの蔵書を所有していた。この蔵書が靈元天皇のもとに渡る機会は複数あったと考えられるが、現在までに明らかにされているものを順を追って検討したい。

『葉室頼業記』によれば、譲位してまもなくの寛文三年（一六六三）二月六日、御幸始に際して「新写之御記録十包」を靈元天皇に進上している（葉室頼業記、小川a）が、その詳細は不明である。<sup>(3)</sup> 靈元天皇が一〇歳を迎えたばかりであったことを思えば、ごく基本的な書物が選ばれたのではないかと想像される。翌四年八月一日には「即之筆一卷」<sup>(4)</sup> および「杜氏通典」一部が贈られ（禁裏番衆所日記、酒井d）、その九日後には『明月記』が贈られた（勸慶日記同月一〇日条、石田（実）b）。

この後、寛文六年（一六六六）にいたり、父後水尾法皇の命によって、靈元天皇へ自分が書写せしめた記録類新写本を大量に進上することになる。これは万治四年（一六六一）の大火で後西天皇所蔵本の親本であった禁裏本の大半が焼失してしまい、その後即位した靈元天皇の手許には書籍があまり残されていなかったためと考えられる。この寛文六年の禁裏への写本進上の経緯はこれまでの研究によって既に明らかにされている（是澤a、本田、吉岡、田島a等）が、今一度、確認しておきたい。

『葉室頼業記』寛文六年（一六六六）二月二六日条より

從<sup>(後西)</sup>新院<sup>(基福)</sup>一園殿・頼業召候て、則參候へハ、御対面ニ而仰ニハ、昨

（後水尾）  
日法皇へ御幸成候へハ、何ニても御写置候物候ハ、禁中へ被レ進  
写させ候様ニ仰也、新院御記録少々、其レハ新院御用ニも無之候間、  
則可レ被レ進也、又院中之御記、先年從「法皇」御借被レ成候、それハ  
院中ノ御記候間、不レ進候、

同三月二一日条より

（宣慰）（忠康）（定矩）  
四人法皇へ召、芝山・長谷・梅小路殿等御使ニ而、新院、法皇へ被レ仰  
上ニ候ハ、禁中之御記録不レ残写被レ置候、炎上ニ北御文庫ニ而残候  
間、禁中へ可レ被レ進候、日限ハ廿四日、日柄能候間、四人共、廿  
四日新院へ可レ参由也、可レ相渡ニ候由也、自レ其法皇へ又持参可レ仕  
候仰也、

同三月二四日条より

新院へ四人参申候、先日被レ仰候御記録、今日、日限能候間、被  
レ進候由、御対面ニ而仰也、御記箱七十合也、則目録ニ而箱請取申  
候也、從レ其法皇へ箱持せ参也、長櫃八ツニて持参也、法皇ニて、  
四人箱五十目録合也、廿箱残候也、芝山殿・池尻殿・長谷殿・梅  
小路殿、御肝煎也、昼さりむき、夕飯御振舞也、目録ニ合申候箱  
五十、禁中へ持せ参也、新院仰ニハ、禁中之御記不レ残写被レ置候、  
其外諸家所持仕候御記、御借被レ成候て、写被レ置候、其仁へ御理  
可レ被レ仰候へ共、禁中へ被レ進候上ハ、御理不レ及候由仰也、禁中  
へ被レ進候上ハ、新院ニハ少も御秘シ不レ被レ成候へ共、法皇何と  
やらん御念入候由、仰之由、被レ聞召ニ候由也、新院御封切上申候、  
其後、箱ニ法皇ノ御封御付被レ成候也、御用之義ニ而、封開候ハ、  
法皇へ可レ申上ニ候由也、其後ハ新院へ可レ申上ニ候仰也、

今日被レ進候御記箱之目録

一、続日本紀	一箱	一、続日本後紀	同
一、三代実録	同	一、国史部類	同
一、令集解	同	一、三代格	同

（○中略）

一、勸修寺家記	一（箱）	一、平戸記	一十九冊
一、園太記	冊三冊 一	一、薩戒記	一
一、甘露寺家記	一	一、日次雑々記	四箱

（○中略）

一、雑々無目録 五箱

已上七十合也、  
（靈元）  
鏡・目録有、法皇ノ御封也、

今日、主上へ目録懸ニ御目、箱五十合、御文庫へ入也、無目録五箱、  
新院御封也、勸修寺家記箱内ニ、永昌記九冊、吉記十九、吉続記  
十七冊也、

園・頼業兩人新院・法皇へ為「御礼」、從「禁中」御使参也、六十五箱  
ハ法皇ノ御封、無目録五箱ハ新院御封也、

同三月二五日条より

今日、昨日之残箱廿、目六ニ合申候也、四人法皇へ参見合候也、

新院之御封廿、持参仕返上候也、御使田向、則御文庫へ入也、昨日  
從「新院」御記七十箱、禁中へ被レ進候由、  
（貞常）  
服部備後守へ物語候也、

以上の記事に見えるように、後西上皇が父後水尾法皇を訪問した際、  
写しておいた物があつたら、どんなものでも靈元天皇に進上して写させ  
るようにとの命を承った。それに対して後西上皇は、手許に持っている  
記録類は必要がないので進上する、ただ法皇御所の記録についても先年  
法皇より借りて写したが、それは法皇のところにあるであろうから進上  
しないことにする、と園基福および葉室頼業に語ったのである。さらに  
それより約一か月後、今度は頼業らが後水尾法皇に召され、後西上皇  
が写しておいた禁中の諸記録が焼けずに残っていたため、天皇に進上す  
ることになり、来たる二四日に上皇のもとより法皇のところへ運ぶよう  
命じられた。そして二四日当日には、箱七〇合が運び出され、二日にわ  
たって目録との照合（一部は目録の作成）が行われて法皇の封がなされ、



天皇のもとに運び入れられた。二四日の記事によれば、禁中の記録を写した写本だけでなく、諸家（勸修寺家や甘露寺家等）の記録を写した写本も進上されたようであるが、頼業に洩らした後西上皇の言葉からは後水尾法皇に対する不満も感じられ、この靈元天皇への譲渡が後水尾法皇と後西上皇との力関係によってなされたものであることが窺える。ともかくもここでは進上された七〇箱は主に史書であって文学書は含まれていないこと、また後水尾法皇も古写本の進上までは要求しておらず、恐らく後西上皇が自ら蒐集したり法皇より賜わるなどして集積した古写本はそのまま上皇の手許に置かれた可能性が高いこと（この点は後で確認する）を指摘しておきたい。文学書が含まれていないのは、恐らく後水尾法皇の手許にも存在していたからであろう。七〇箱と現東山御文庫本との対応関係については田島<sup>a</sup>論文に詳しいが、一部修正を加えて稿末の表一に示した（参考として、桜町天皇在位中の目録と考えられる勅封一七四―二二二五『禁裡御蔵書目録』（Ⅳ）（以下、度々言及する目録については史書関係と文学書関係とに分け、成立順にローマ数字番号を振ることとする）および勅封一八二―九一二『日次記以下御目録』（Ⅴ）、中御門天皇の蔵書目録と考えられる勅封五九―三一一『御文庫記録目録』（Ⅱ）および勅封一〇四―三一一『書籍御目録』（Ⅲ）所載の箱との対照も記した。なお『御文庫記録目録』（Ⅱ）『書籍御目録』（Ⅲ）は中御門天皇蔵書すべてを網羅したものではないため、対応する箱のないことは存在しなかったことを意味するものではない）。

なお、なぜ寛文六年二月という時期に後水尾法皇が後西上皇に要請したのかは定かでないが、靈元天皇が践祚して三年が過ぎ、一三歳を迎えたために、本格的な学問を開始させようと考えたのではないだろうか。これより以前、寛文三年一二月頃より六年正月にかけては、後西院が蔵する『御湯殿上日記』写本からの転写本作成を後水尾法皇が行なっており（是澤<sup>a</sup>、田島・松澤<sup>b</sup>）、それが一段落したことも関係するであろう。

## ② 後西上皇崩御後の蔵書の行方

後西上皇はそれからおよそ二〇年後の貞享二年（一六八五）二月二二日に崩御したが、その時に残された蔵書の行方が問題となる。石田実洋氏が紹介された『時量卿御記 後西院御喪事』二月二二日条によれば、崩御後、すぐに上皇に仕えていた平松時量と高野保春・岡部盛次が立ち会って上皇の御文庫に封をしたが、直後に靈元天皇の仰せにより上皇第二皇子幸仁親王が封をすることとなり、さらに四月一二日には勅命によって穂波経尚と高野保春・櫛笥隆慶が封をすることになった（石田（実）<sup>a</sup>）。この間、二月二三日には近衛基熙に上皇の遺書一通が贈られるも、翌々二五日には子細があり、遺書の返却が求められている<sup>9</sup>。この後、五月二九日から六月一日にかけて靈元天皇や近衛基熙、基熙室常子内親王（後西天皇妹）、基熙男家熙、家熙一女、堯恕法親王（後西天皇弟）等に形見分けがなされ（基熙公記、无上法院殿御日記、堯恕法親王記、基量卿記、時量卿御記）、さらに七月末にいたり上皇御文庫の主だった蔵書が靈元天皇に進上されることになった。

『基量卿記』貞享二年（一六八五）七月三〇日条より

一、後西院御文庫ニ有之候古今御伝受之箱并御記少々、先日禁中へ被<sup>レ</sup>進上、今日又残御記・額写等尽可<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>御文庫<sup>一</sup>由、  
（千種有様、御原資庫）  
 以<sup>二</sup>両伝奏<sup>一</sup>平松中納言へ稲葉丹後守申之、件之御記、半分余御代々之宸記、（時量）御正記也、以上廿箱之内、宸記分八箱、今日参了、残十二箱令<sup>二</sup>紛失<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>行方<sup>一</sup>、若臣下記故、左相府へ被<sup>レ</sup>下敷、  
（近衛基熙）  
 内々和歌・抄物・御記等可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下由、後西院兼而仰之由也、依<sup>レ</sup>左府出頭異<sup>レ</sup>他也、雖<sup>レ</sup>然不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>進<sup>二</sup>禁中<sup>一</sup>、他所へ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下義、不<sup>レ</sup>叶<sup>二</sup>其理<sup>一</sup>之由、公武御沙汰治定之間、唯今及<sup>二</sup>此沙汰<sup>一</sup>、残十二箱御記如何、不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>子細<sup>一</sup>、莫<sup>レ</sup>言々々、

古今伝授の箱については『基熙公記』同年七月二十八日条に「從禁中一女房奉書到來、御伝授御箱之事也、此間之事難レ記、為レ道愁歎無レ極、落涙而已」と記されており、これから推測すると、あるいは後西上皇の遺志としては基熙に下賜するつもりであった可能性が考えられよう。<sup>(10)</sup>

崩御直前に後西上皇がどのような書籍を持っていたのか、前節で紹介した『葉室頼業記』の記事から考えると、論理的にはA寛文六年以降に蒐集した史書の新写本、B文学書など史書以外の新写本、C古写本等貴重書や愛玩品、ということになろう。これ以外に、後水尾法皇所蔵書籍を転写した新写本が寛文六年の進上対象から除かれた可能性も考えられるが、進上した七〇箱の大部分に目録が付されていたことからすれば、結局、除外されることなく箱に入っていたものはそのまま進上されたと思われる方がよいであろう（別箱とされていたものは、後西上皇のもとに残されたのかも知れない）。一方、『基量卿記』から崩御時点で所持していたことがわかるのは「古今御伝受之箱」と「代々之宸記」八箱を含む「御記」、それに「額写」「和歌・抄物」という内容であり、このうちa「古今御伝受之箱」b「代々之宸記」c「額写」は霊元天皇が接収したことが記されているが、それぞれ東山御文庫本の中で該当しそうなものを探すと、a勅封六二一八、一六三、一七、六八、一七、b勅封六七一、二、六七、一五の一部、一〇、一一が挙げられる（cはおそらくマイクロフィルム未撮影と推測される）。

これ以外に後西上皇旧蔵書を検討する上で有用な史料として勅封一二〇、一一三、一二『御本御目録』（I）が挙げられる。これは田島公氏によって紹介され、その後、石田実洋氏が詳細に検討されている（田島b、石田（実）d）が、後西上皇が文庫を整理した際に作成した折紙一四紙からなる目録草稿で、その後、霊元天皇が整理を行なった際にも使用し、書き入れがなされている。今、両氏によって明らかにされた点を本稿の論旨に関わる範囲でまとめておくこととする。

① 現状は、三紙が勅封一二〇、一一三、一二、一一として、ついで残りの九紙が勅封一二〇、一一三、一二、一二として整理されている（以下、本節ではたとえば勅封一二〇、一一三、一二、一一を1・1と記すこととする）。このうち1・10までが後西上皇が記したもの（一部に霊元天皇の追記あり）であり、残りの11・12が霊元天皇の筆跡と考えられる。

② 12を除いた各紙には冒頭部に十千の文字が、尾部に十二支の文字が記されている（1・2と6・7は十千のみ。また5と11は十二支のみ）。十千は後西上皇所蔵段階での配列であり、その後、霊元天皇に移動した段階で「第一」～「第十一」の序数が割り振られ、現物との照合が行なわれて、不足目録としての12が作成された。さらにその後、5と11も合わせて十二支の番号が割り振られた。十千の番号の対応関係で不足しているものがある（「戊終」「己」「辛」「壬」「癸」）が、これについては当初は存在していたが、対応する書目が霊元天皇以外の人物に分与され、その蔵書群とともに移動した可能性も考えられる。

③ 書名に付された圈点や合点等の符号、また追記は、断定はできないが霊元天皇の可能性が高い（石田氏は追記について「ほとんど霊元天皇の筆跡のようであるが、後西天皇によるものか、と思しき追記も存する」とする）。1・2冒頭部分の抹消された書目は大部分が現在陽明文庫に伝来しているが、これも霊元天皇が抹消したものであり、それ以前に後西上皇から直接近衛家に分与された可能性が高い。以上の点について補足ないし修正を加える。

① 作成者の別は、紙質が異なる点からも裏づけられる。すなわち1・10までは紙質が同じであるが、11・12はそれとは異なっている。  
② 目録の文字符号が実際に書物が納められていた箱と対応していたであろうことを考えれば、5は十千の番号が割り振られていなかったわけではなく、内容が同じ即位関係の書物を記す1・2と一体の目録と

して存在していたのであろう（だから逆に1・2には十二支が記されていないのである）。十千番号で欠けている部分が第三者のもとに移動したと想定する説は魅力的であるが、一方で、十二支のうち「午」「未」の字を割り振られたものが見当たらないことからすれば、単に、靈元天皇の再整理後に目録が紛失した可能性も捨てきれない。なお石田氏は自説の問題点として十二支の文字が割り振られていない目録が存在する（1・2、6、7）ことも挙げているが、このうち1・2については上記の解釈で説明できる。6・7についてはあるいは目録所載書目の多くが現高松宮本であること（後述）と関連する可能性もあろう。

③ 原本を観察すると、書目に爪点が付されている場合がある（稿末表二参照）。爪点と合点等との関係を4で見ると、墨筆合点ないし墨抹のない書目は末尾の二点を除いて爪点が施されるという関係にある（三番目に記される『禁掖秘抄』は墨筆合点を抹消した上で爪点が施されている）ことから、4に関しては墨筆合点によって書目照合がなされた後に爪点による書目照合がなされたということになる。追記については例えば4の『古口伝目録』『雜事』の「輪王寺宮借用」、『弁官至用集』の「左府借進」は後西上皇が記したものと見るべきであろう（とすればそれらとの位置関係から墨筆合点が先に記された、すなわち後西上皇が記した可能性が考えられる）。1・2の抹消書目については、後西上皇が直接近衛家に分与したものと推測する点は筆者も同様に考えている（小倉（慈）a b）が、書物の不存在に気づいた際に書目を抹消する事例は他の東山御文庫本の目録でも見出すことができず、分与した後西上皇自身が抹消したと見るべきではないかと考える<sup>(1)</sup>。

次に『御本御目録』（I）に記載される書目と現存本との対応関係について見てみることにしたい（表二）。これは既に石田氏によって試みられている（1については田島氏も行なっている）が、石田氏は候補が複数考えられるものは原則として省くなど慎重な態度をとられたので、こ

ここでは石田氏の表作成後にマイクロフィルムが公開された東山御文庫本も加え、推測も交えつつ積極的に対応関係を比定してみることにした(稿末表一参照)。

これらは後西上皇崩御後に靈元天皇が接収した史書である。十千番号のうち、甲は上下、乙は天地、丙は乾坤、丁は宇宙、戊は始(終)、庚は方円、というように、それぞれ二箱ずつから成り立っていたようであり、仮に十千のすべてが二箱ずつであったとすると、全三〇箱ということになる。これは『基量卿記』に記される二〇箱という数と一致するが、それが偶然なのかあるいは同一と見做すべきなのかはわからない。ともかくも、1〜10に記された書目(のうち靈元天皇による追記を除いた部分)は後西上皇が崩御時まで所有し、その後、一部を除いて靈元天皇の手に渡ったものということになる。このなかには11の16や18・21、2の12、6の5・10、7の22・23、のように古写本が少なからず含まれており、現在、東山御文庫に伝来する古写本の一定数はこの時に禁裏に入ったと考えられる。要するに先に後西上皇崩御後に靈元天皇の手に渡った蔵書群ABCの内AおよびBの一部ということになる。

さて後西上皇蔵書の内、残った文学書<sup>(12)</sup>についてはどのように考えたら良いであろうか。久保木秀夫氏によって宮内庁書陵部所蔵御所本の中に後西天皇の副本作成事業によって作成されたと考えられる写本が一〇〇点近く含まれていることが指摘されている(久保木a b)<sup>(13)</sup>が、総体としていつどのような形で禁裏本に含まれることになったのかは明らかにされていない。<sup>(14)</sup>この点は明確でないが、先述した伝授や折に触れた贈物を除き、大部分は後西上皇崩御後に靈元天皇の手に渡ったと考えておきたい。

このような目から東山御文庫に収蔵される諸目録を見てみると、まず注目される目録として、外題に靈元天皇の筆跡で「禁裏目録 四季恋雜擔子之外」と記される墨付七丁の勅封六九一五―三『禁裏目録』(本文も靈

元天皇筆)<sup>(i)</sup>が挙げられる。靈元天皇自身が「禁裏」と記していることから靈元天皇在位時(寛文三年(一六六三)―貞享四年(一六八七))の禁裏目録と考えられるが、冒頭には

古今伝授 勅封 檐子  
古今伝授 勅封 檐子  
秘 神記歌 勅封 箱入  
出 和漢雜々 勅封 檐子  
出 勅封 檐子  
歌書抄物 勅封 檐子  
古抄 勅封 箱入  
近代歌 勅封 文匣入  
元 和已後之和歌 勅封 檐子  
連歌 和漢々和 勅封 箱入  
塗檐子 勂封 一个  
〇雑々歌書 勂封 御目録在御前、  
長櫃入

と記されており、後西上皇旧蔵書との関連が推測される。この後には『古今和歌集』等具体名を記した書目一〇六点が挙げられているが、その中には後水尾天皇から後西天皇へ伝領された藤原定家筆『更級日記』や後西天皇筆の外題で「明暦」印を持つ『作者部類』(書陵部五〇二―四一〇)が含まれている。定家筆『更級日記』は後西上皇御遺物として靈元天皇に進上された(基量卿記貞享二年五月二九日条)ものなので、この『禁裏目録』(i)は貞享二年五月以降、靈元天皇が讓位する貞享四年三月までの間の内容を記した禁裏の歌書目録であって、それは後西上皇旧蔵書を含むものであったということが明らかとなる。

それでは他にあったという「四季・恋・雑檐子」に関する目録はどうであろうか。これについてはやはり靈元天皇自身が記した勅封一〇二―三―三八『歌書目録』(ii)が参考になる。同目録は墨付二四丁で、あ



る段階での靈元天皇の蔵書目録と考えられるが、次のような構成になっている。<sup>(15)</sup>

春上	「代々御集」等68点
春下	「後鳥羽院御集」等55点（末尾部分は別筆による追記）
春小	「青表紙御目六無」相違、
夏小	「御目六無」相違、
夏	「御目六無」相違、
秋上	「御目録無」相違、
秋下	「殿宴和歌」等62点（行間追記あり）
冬大小	「御目六無」相違、
雑春	「御目六無」相違、
恋小	「御目六無」相違、
雑小	「御目六無」相違、
雑夏	「御目六無」相違、
雑秋	「御目六無」相違、
雑	「藤川百首抄出」等61点（末尾に貼紙追記あり）
雑賀	（二十数点記すも×印にて全部抹消）
雑冬	「御目録無」相違、
恋	「新撰和歌」等34点
雑恋	「詞林采葉抄」等93点（行間追記、末尾追記あり）

ここで注意されるのは「御目六無」相違、等の記述である。これは靈元天皇がこの目録を作成する以前に目録が存在していたことを意味するが、その目録の作成主体としては後水尾天皇・後西天皇・靈元天皇自身の三人の可能性が考えられる。そこで同目録で具体的に書名が挙げられている部分を見てみると、久保木<sup>a</sup>論文で万治四年禁裏焼失以前に後西天皇によって作成された禁裏本の副本と見られる「代々御集」（書陵部五〇一―八四五）『紅塵灰集』（書陵部五〇一―六五五）『慕風愚吟集』（書

陵部五〇一―六九六）が春上の中に、『和泉式部集』（書陵部五〇一―四二二）が春下の中に見られること、後西天皇の歌集である『鷺巣』（勅封六八一―一、同天皇自筆）が春下の中に、後西天皇筆『逍遙院内府入道百首』（書陵部特五三）が秋下の中に（行間追記）、「明暦」印を持つ『袖中抄』二〇冊（H一六〇〇―四三六）や後西天皇外題（図書寮典籍解題文学篇六六頁、続文学篇二五頁）『招月清岩和歌抄』（書陵部一五二―四七）および『列首万葉』（書陵部五〇一―六七二）が雑恋の中に見られることなどにより、少なくとも後西天皇旧蔵書が含まれたものと見て良いであろう。もちろん靈元天皇自筆・東山天皇自筆と考えられる書目もあり、靈元天皇によって収集された書目も多いと思われるが、それは後西天皇旧蔵書を含みこんだものであったのである。<sup>(17)</sup> よって後西天皇の蔵書を検討する上で、この『歌書目録』（ii）は基本とすべき資料の一つということになる。

そして以上の『禁裏目録』（i）と『歌書目録』（ii）にその後の増加も合わせて整理し直したのが勅封六九一―一八靈元天皇等筆『歌道目録』（外題「歌書目録」）（iii）および勅封六九一―五一六―一靈元天皇筆『仙洞歌書御目録』（外題「歌書目録」）（iv）ということになる。『歌道目録』（iii）についてはその重要性を田島氏が指摘し（田島b）、それを承けて酒井氏が検討を加え（酒井a）、さらに小川氏が「有栖川宮に譲渡される直前の書目を書き上げた」と推測されている（小川b）。酒井氏は勅封六九一―五一六―二靈元天皇筆『仙洞新写歌書目録御土代』（外題「新写歌書目録」）（酒井氏自身は勅封六九一―五一六―一の『仙洞歌書御目録』と誤表記している<sup>(18)</sup>）に享保九年（一七二四）書写の『古今金玉集』（現高松宮本H一六〇〇―一二五七）が掲載されていることから、それが享保九年頃の靈元法皇所蔵の歌書の目録であるとし、『公宴統歌』に関する同目録との対比から『歌道目録』もその頃の目録と考えているようである（酒井a）。論理的には酒井説以外の考え方も成り立つ可能性があるが、内

容上、『歌書目録』(ii)より後の成立と考えられるので、靈元法皇晩年の蔵書目録と見ること自体に問題はないであろう。ちなみに『歌道目録』(iii)は折帖で、表面冒頭に黒塗檐子の「廿一代集」など個別の檐子や箱に入っている書目七三点が書き上げられ(お手許に置かれたものか)、ついで「元和已後和歌」一檐子、「連歌」一檐子、それから「百首懷紙透写」一〇巻と「七夕三首懷紙透写」一巻の一箱、ついで「冰 甲乙／四季恋雜 大／同 小／雜四季恋賀／和歌抄／歌書抄／和歌雜々」と記され、十数丁の白紙をはさんだ後、春大・春小・夏大・夏小・秋大の内訳が、続いて裏面に秋小・冬大・冬小・恋大・恋小・雜大・雜小・雜春・雜夏・雜秋・雜冬・雜恋・雜賀・和歌抄・歌書抄・和歌雜々の内訳が記されるという構成になっている(なお、註(41)も参照)。

一方、『仙洞歌書御目録』(iv)の方は、冒頭に「古今集 古本」「九十賀記為家卿筆、奥定家筆、」「悠紀方屏風歌為家卿筆、」が内裏に進められ、「榮花物語 新写」が大樹に送られたことが記されているので、「仙洞」の目録であることが推測されるものであるが、ついで「和」上中下一棹、可・伴各一棹、「東戸棚之内／南戸棚之内」、寛文三年以来の詠草や懷紙・短冊類を納めた永・会各一棹、という構成が示され、それより和上中下の内訳、和上長持の内の甲檐子の内訳、和下長持の内の乙檐子・伊抄檐子・三抄檐子・詩文章檐子の内訳、抄長持の内の抄物檐子・入薫箱の内訳が記されるという構成になっている(途中、抄之長持の内の古檐子・歌書抄物檐子については檐子の内に目録がある旨記される)。和上長櫃の中には「古今伝授箱」なども含まれており、靈元上皇の手許に置かれた書籍の目録と見て良いであろう。

今後、これら書目と現存本との対比を行ない、後西上皇旧蔵書の靈元天皇蔵書への混雜の過程を明らかにすることが課題となる。

### ③ 幸仁親王への分与

後西上皇より生前、また崩御時に近衛基熙に書物を分与したことがあったことを前節で述べたが、「はしがき」で述べたように後西天皇皇子幸仁親王も上皇旧蔵書を伝領することがあった。<sup>(19)</sup>これについて後西上皇より直接、賜与されたと見る説が通説である(小倉(慈) a b、酒井 d)が、必ずしもそれは証明されたものではない。<sup>(20)</sup>この点についてまず確認すると、後西天皇の蔵書印である「明暦」印に加え、幸仁親王の蔵書印である「幸仁」印ないし「幸」印を持つ書物が高松宮本中に三四点存する(小倉(慈) b)。<sup>(21)</sup>したがってある段階で後西天皇の蔵書が幸仁親王の手に渡ったことは確実である。<sup>(22)</sup>またかつて和田英松氏は以下の奥書を持つ『水日集』写本を蔵していた(和田三九六頁)。

右水日集上下、凡歌数八百九十六首者、後西院御製勅名の集にて、則宸翰の御本有栖川兵部卿親王御所持也、不思議に伝写し侍りぬ、正奇宝とし奉るべきものなり、

元禄九歳子初秋初九 松残子

元禄九年(一六九六)の有栖川宮家当主は幸仁親王であるから、このとき以前に同親王が後西天皇自筆の『水日集』を所持していたことが知られる。『水日集』は「貞享元年十二月廿日まで年月の順にのせられたれば、御詠のをりく、書とめさせ給ひしものにて、崩御あらせられしは、翌二年二月二十二日なれば、殆ど最後の御製をも収められたものならんか」(和田三九六頁)と考えられており、少なくともこの『水日集』については後西上皇崩御直前から元禄九年までの間に幸仁親王に対して賜与されたということになる。後西天皇自筆であることを考えれば、恐らく御由緒品として形見分けされた可能性が高いと考えられるが、だとすれば、これをもって後西天皇から幸仁親王への蔵書の賜与を一般化す

ることは難しい。

一方、H一六〇〇―二一伝藤原信実筆・靈元天皇贊『柿本人麿像』には鑑定極札が付属しているが、その包紙に「從<sup>(靈元)</sup>仙洞<sup>(幸仁親王)</sup>兵部卿宮御拝領人丸」と記されており、靈元天皇讓位後、幸仁親王が兵部卿であった時期（貞享四年（一六八七）―元禄一〇年（一六九七））に、靈元上皇より親王に下賜されたものであることがわかる〔中村〕。しかしこれも恐らくは和歌に関する伝授に伴うものであった可能性が高く（元禄元年一二月一六日に和歌天仁遠波伝授を受けている〔靈元上皇院中番衆所日記〕）ので、これが候補に挙げられる）、これを靈元天皇から幸仁親王への贈与の一般例と見做すことも難しい。

これ以外の点については状況証拠とならざるを得ないが、関係資料を追ってみることにしたい。

まず『有栖川宮日記』によれば、貞享三年（一六八六）に『岷江入楚』や『詩歌合』を後西天皇第四皇子義延法親王・後西天皇第五皇子天真法親王・梅小路共方に貸す（三月二四日・二八日、閏三月二五日、五月二八日条等）一方、中院通茂から「後西院様御会之写御本十五冊」を借りて返している（閏三月二日条）ことなどが知られ、必ずしも蔵書量が充分ではなかった様子が窺われる<sup>(23)</sup>。貞享三年一月二〇日には靈元天皇の命により「易抄十三冊」を献上しているが、この書が後西天皇と関係のあるものであったかどうかは定かでない。元禄三年（一六九〇）には飛鳥井家より「新拾遺・続後拾遺」「後撰・後拾遺」「新勅撰・新後撰・風雅・新後拾遺」「続後撰・続千載・新千載・新統古今」等の歌集を借用したり返却したりしている（四月二二日、六月二四日条）。幸仁親王薨去後の元禄一二年二七日には清水谷実業より「為家卿集」<sup>(24)</sup>「具起卿詠」「歌書写本」「花山院御筆巻物」「大臣名」等が返却されているので、これらが幸仁親王の蔵書であったことが知られる。同年一〇月九日には竹内惟庸に幸仁親王が借用していた「源氏小本十冊」としたち二冊」を、清水谷実

業に「としたち十二冊」を返却している。

次に第二節で触れた『時量卿御記』によれば、後西上皇崩御後、平松時量・高野保春らが御文庫に封をしたにもかかわらず、靈元天皇の命によってさらに封を加えたのは幸仁親王であった。これは幸仁親王自身の願いによるものであると平松時量は後になって京都所司代稲葉正往より聞いており、幸仁親王を非難しているが、四十九日が過ぎた後は再び勅命によって、今度は穂波経尚・高野保春・櫛笥隆慶が封をすることに變更され、幸仁親王は排除された（同記二月二三日、三月四日、四月二日・一三日条）。この間の経緯については不明であるが、後西天皇第一皇子で女御明子女王が生んだ唯一の皇子でもあった八条宮長仁親王は既に薨去しており、第三皇子永悟法親王も薨去、同母弟の第四皇子義延法親王が六歳下（第五―第七皇子も出家している）、八条宮を継いだ第八皇子尚仁親王はまだ一五歳で元服前（翌貞享三年に元服）という状況を考えれば、たとえ近衛基熙が格別な寵愛を受けていたとしても、第二皇子で有栖川宮家当主でもある幸仁親王が後西上皇蔵書のかんりの部分を受け継ぐことは社会的に自然なことと言える。最終的に後西上皇蔵書を接収したのが靈元天皇であったことを考え合わせれば、幸仁親王が願い出たというよりは靈元天皇が幸仁親王を利用した可能性が高いのではないであろうか。実際、後西上皇の遺書は幸仁親王宛が一通、尚仁親王と第六皇子公弁親王宛が一通、近衛基熙宛が一通、平松時量と高野保春宛が一通という構成であった（基熙公記、註（9）参照）。

さらにこのことは貞享二年一二月に在京の水戸史館員が「後西院様御本」「後西院様御記録」について有栖川宮家に問い合わせていること（大日本史編纂記録）からも窺われる。「有栖川様御記録ハ後西院様御本共二御座候様ニ達「御耳」候」とあるように、後西上皇旧蔵書が有栖川宮家に引き継がれることは水戸史館員にとっても自然な理解であった。

ところでこれに対し、『大日本史編纂記録』は「後西院御記録ハ壹巻



(幸仁親王) (高仁親王) (道祐法親王) (公弁法親王)  
も有栖川様へハ不被<sup>レ</sup>遣、八条様・聖護院様・毘沙門堂様御三所へ皆々御讓被<sup>レ</sup>遊候、両御門主にハ御用ニ無<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>候間、皆々八条様へ可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>進と内々両御門主被<sup>レ</sup>仰候故、御本共参候ハ、殿様御用ニ立可<sup>レ</sup>申物も可<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>と生嶋玄蕃頭被<sup>レ</sup>申談<sup>二</sup>候、然処禁中へ書目録覧被<sup>レ</sup>遊、珍敷物者皆々御取被<sup>レ</sup>成、流布之物斗八条様へ被<sup>レ</sup>遣候、殿様分御献上被<sup>レ</sup>遊候一代要記も旧本・新写両部共二官庫へ納り申候、残念至極奉<sup>レ</sup>存由玄蕃頭被<sup>レ</sup>申候、」と八条宮諸大夫生嶋永盛の談を伝えている。これについて、旧稿(小倉(慈)a)では「明暦」印が捺された幸仁親王蔵書が確認できることから、有栖川宮家と八条宮家が「借用を断るために述べた虚言であつた可能性も考えられる」と記したが、徳川光圀編纂詞文集に後西院が「扶桑拾葉集」の名を与えたり(扶桑拾葉集序)、『二代要記』の献上を受けるなど後西天皇と水戸徳川家との関係は良好であり、その関係は例えば元禄一二年の幸仁親王薨去時に徳川光圀に御遺物を贈進している(有栖川宮日記同年一〇月一六日条参照)ように、幸仁親王の時代にも続いていたと考えられるので、少なくとも有栖川宮家が水戸徳川家に対して冷淡な態度をとった可能性は低いと見た方が良さそうである。だとすればやはり幸仁親王へは後西上皇旧蔵書は分与されなかったのであらうか。

ここで注意すべきことは水戸史館員が尋ねたという点であらう。すなわち水戸史館員は後西上皇旧蔵書一般について問い合わせたのではなく、「後西院様御記録」つまり後西上皇旧蔵書のうちの史書について問い合わせたのであり、有栖川宮家・八条宮家の回答もそれを踏まえたものであつたのではないかと考えられる。だとすれば、この回答をもって後西上皇旧蔵書が全く幸仁親王のもとに渡らなかつた証左と見做すことはできない。

結局のところ決め手はないが、天和から宝永・正徳頃にかけて霊元天皇は活発に歌書収集を行なっており(酒井ac)、幸仁親王が薨去する

元禄一二年までの間に霊元天皇が後西天皇旧蔵書(その中には「明暦」印が捺されたものが含まれる)を下賜するだけの理由となる事由は見出せない。後西上皇が生前に歌書を中心とした蔵書の一部を幸仁親王に与えていたか、崩御時の遺物贈与の一部が霊元天皇によって認められたかのどちらかと考えるのが妥当であらう。

#### ④ 後西天皇の書籍収集の目的

これまで三節にわたつて後西天皇の蔵書が霊元天皇、また幸仁親王の手に渡る過程を検討してきたが、そもそも後西天皇はなぜ書籍収集を行なつたのであろうか。これについては山科道安著『槐記』享保九年(二七三)の記述が影響を与えてきた。

後西院ハ、各別ノ遠慮アリシ君也、新院ニヲリイサセ玉ヒシヨリ、唯一向ニ禁中ノ御記録ヲ、御宸筆ニテ大方ノコラズ遊バサレテ、両部トナシ、院ノ御文庫ニ収メラレタリ、初ハイラザル御事也ト思ヒシガ、果シテ右(筆者注：文脈上、後光明院の代を指すが、正しくは万治四年(二六六)のこと)ノ炎上ニ一冊モノコラズ焼失タレドモ、此新写遣リシ故ニコソ、今ノ御記ノ分ハ皆、後西院ノ宸翰也ト仰ラル、(九月七日)

この記事には火災の時期など一部に誤りがあることが指摘されている(平林、田島a)が、書籍収集の目的という点からは再検討がなされて来なかつた。すなわち禁裏の火災に備えて禁裏本の副本を作成したという理解である。しかし後西天皇による禁裏本の副本作成事業は践祚以前からのものであつたこと(久保木a)、禁裏本の副本として作成したのであればそもそも後水尾法皇の仰せを待つまでもなく譲位とともに霊元天皇に譲るべきであつたこと、禁裏本以外の副本も作成していること(葉室頼業記寛文六年三月二四日条)などから見ても、妥当とは思われない。



そうではなく後西天皇にとつての副本作成事業は、第一に自分のため——自分の手許に置いておくため——であつたと考えるべきであらう。後西天皇はあくまでも弟高貴宮（識仁親王、靈元天皇）が成長するまでの中継ぎの天皇であつたのであり、禁裏の書籍が自由になるのは在位中の間だけであつた。だから副本作成に熱心に取り組んだのである。讓位後も収集に努めて蓄積した蔵書は、最終的には大部分を自分の皇子に譲ることを考えていたと推測される。そのように考えると、第二節で言及した『御本御目録』（I）の112で冒頭の書目14の一点が抹消されていることも説明がつけやすいであらう。ここで抹消されている書目はすべて天皇の元服に関する史料である。これに対し15の『代々御元服』は勅封一四三―四四に当たるとすれば、天皇元服・皇太子元服・親王元服の順で歴代天皇の元服年月日および年齢を記したものであり、16以下は親王元服に関する史料である。つまり天皇元服に関する史料だけが抹消され、近衛基熙に譲られたということになる。確かに天皇元服においては原則として摂政太政大臣が加冠役を勤めることになっており、摂関家にとつて重要な儀式であることは疑いない。しかし親王元服においても摂関が加冠役を勤めることもあるのであり、それだけではなぜ天皇元服だけが特別扱いされたのか説明がつかない。筆者は、これら『御本御目録』（I）に挙げられた書目は、本来、有栖川宮幸仁親王（もしくは八条宮尚仁親王）に譲るつもりであつた、と考えることによって解決できるのではないかと考える。天皇元服に関する史料を宮家の当主が所有することは、靈元天皇の疑惑を招く、あるいは靈元天皇にとつて何らかの口実を与える危険性があると後西上皇は考えたのではないだろうか。後西上皇が崩御する四年前の延宝九年（一六八一）には皇位継承予定者であつた一宮を靈元天皇が強引に出家させ、一宮の外祖父小倉実起らを処分、五宮を儲君に治定するという小倉事件が起きている。そうした緊張状況の中で、後西上皇は蔵書の行く末についても深く思いをめぐらし、その結果、ある

段階で天皇元服関係史料を近衛基熙に分与した、と推測しておきたい（なお、『基量卿記』貞享二年七月三〇日条にて推測されているように、それ以外にも基熙に賜つた書籍もあつた<sup>(26)</sup>）。

## ⑤ 靈元天皇による後西上皇旧蔵書の管理

靈元天皇は後西上皇旧蔵書を接収して後、それをどのように管理したのであらうか。本節ではその問題の解明を試みたい。

これまでの研究で、寛文六年に後西上皇より靈元天皇に進上された書籍がその後、代々の天皇に伝えられ禁裏文庫本の基礎となつたことが明らかとなつているが、靈元天皇が三四歳で皇子の東山天皇に讓位した後、七九歳まで齢を保つたのに対し、東山天皇は宝永六年（一七〇九）に三五歳で中御門天皇に讓位、その年の内に急逝したため、蔵書の動きは単線的なものとはならなかった。この点について、まず酒井氏の研究（酒井a b）をもとに史書関係について整理してみることにする。

靈元天皇が東山天皇に讓位したのは貞享四年（一六八七）三月二二日であるが、『光榮卿記』享保四年（一七一九）四月一四日条には、

凡東山院即位時、從<sup>(靈元)</sup>法皇<sup>(靈元)</sup>被<sup>(靈元)</sup>讓申<sup>(靈元)</sup>御記筥八十三合、外檐子也、其後又一合二合法皇被<sup>(靈元)</sup>召<sup>(靈元)</sup>之、度々有<sup>(靈元)</sup>出入事、仍先日出<sup>(靈元)</sup>御御文庫<sup>(靈元)</sup>被<sup>(靈元)</sup>改<sup>(靈元)</sup>之云々、<sup>(27)</sup>

とあり、東山天皇が即位した段階で八三合の「御記筥」と「檐子」が譲られたという。「東山院即位時」というのは烏丸光榮の記憶違いで、石田俊氏が指摘した『基量卿記』元禄五年（一六九二）五月一五日条等の記事により（石田（俊））元禄五年六月二七日のことと考えられる（筥数について『基量卿記』同年六月二六日条には八〇合分の目録を基量が書いたと見える<sup>(28)</sup>）。「檐子」については詳細不明であるが、御記筥八三合は、寛文六年後西進上御記七〇合に貞享二年（一六八五）正月に徳川綱吉か

ら献上された『日次記』等の写本〔基量卿記同月二六日条 石田(実) b〕や靈元天皇が書写させた史書関係の書を含んだものであったろう(『日次記』のほか、宝永四年〔二七〇七〕段階の禁裏文庫の蔵書目録とされる京都大学附属図書館寄託菊亭文庫本『禁裏御記録目録』(菊キ三三)(田島c参照)に見える「年代記之類」「奏事目録并散状」などが候補に挙げられる<sup>(29)</sup>)。

「其後又一合二合法皇被<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>之、」の部分については酒井氏は靈元上皇が管を追加して天皇のもとに送ったと理解しているようであるが、そうではなく、一旦、東山天皇に渡した八三合の管の中から一合・二合ずつ靈元上皇が再び借り出すことがあったことであろう。だから天皇(中御門天皇)が御文庫に出御して確認したのである。

この『光榮卿記』(および『基量卿記』)の記事からは、史書関係の書籍については元禄五年六月に、寛文六年後西上皇進上御記にその後の増加分を加えたもの(靈元上皇が所有するすべてであるかどうかは不明)が天皇に譲られ、原則としてそのまま東山天皇から中御門天皇に引き継がれたこと、但し中には靈元上皇が再び仙洞に取り寄せることがあったということが確認できる。

この点を靈元天皇(および東山・中御門・桜町天皇)の文庫の内、行幸・御幸関係の史料を収めていた箱の目録であった勅封一三〇一―一六『御入記目録』(以下、本節では①②と表記する)に記載される書目を検討することで細かく見ていくことにする。この目録を取り上げるのは、その中に寛文六年後西上皇進上本と後西上皇崩御後の靈元天皇接收本が含まれていると考えられること、目録に記載される書目の多くが東山御文庫本と高松宮本とに分かれて現存すること、年月日を記した不足目録や追加目録などが中に含まれて詳細が判明すること、などの理由による。

①②が靈元天皇の筆による『御入記目録』(①が「行幸」、②が「御幸」、③が元禄一五年七月二六日の日付を持つ『不足目録』、④が中御門天皇筆『御追加目録』、⑤が行幸に関する桜町天皇筆『御追加目録』、⑥が御

幸に関する桜町天皇筆『御新加目録』である。目録の記載と現存本とを対照させた表を作成した<sup>(30)</sup>(稿末表三)。

①には行幸に関する記録六三点(内四点は抹消)が記されているが、このうち40の「聚楽行幸記」以下には末尾の62 63を除き「新加」と注記されている。62 63は明らかに追筆であり、注記を書き漏らしたものとも考えられるので、40以降すべてが「新加」と考えて良いであろう。「新加」と注記された書目の中には「古」と注記されたものも目立つ。「古」とは古写本の意であろう。39以前に記されたものの中には外題もしくは扉題が後西天皇筆であるものが多く見られ、40以降の中にもやはり外題もしくは扉題が後西天皇筆のものが存在する。そこから推測すると、39以前が寛文六年後西上皇進上本であり、40以後が上皇崩御後の靈元天皇接收本および靈元天皇新収本ではないかとの仮説が立てられる。

この仮説を踏まえて御幸に関する記録四二点(内一点は抹消)を記す②を見ると、やはりこの目録においても、「新加」の注記を伴わない20までと「新加」と注記される21以降とに分けられ、前者には後西天皇筆外題が目立ち(但し10は比定される書目の外題が後西天皇筆かと思われるものの、行間に追記されたものであるから、後から追加された書目である可能性が考えられる)、後者には「古」と記される物が幾つも見られる。現所在という観点から見ると、①は大部分東山御文庫中の現存が確認できるが、②には東山御文庫以外に高松宮本中に現存すると見られるものが存在し、対応関係が不明なものについても日一六〇〇―一九九一『記録目録』(Ⅵ)に書名を見出すことができるので、かつては有栖川宮家に伝来していたのではないかと推測される。これら高松宮本に現存する書(および所在不明なもの)は、③において書名が書き上げられ、「已上不足十二冊、／元禄十五年／七月廿六日」と末尾に記されている。要するに②(および恐らく対となる目録である①)は元禄十五年(二七〇二)以前に作成された目録であり、東山天皇に贈る以前に靈元天皇が作成し

た目録であって、元禄一五年に東山天皇が箱を改めさせた際には行方不明になっていったことになる。それは靈元上皇が一旦、禁中より再び仙洞に戻した際に取り出して手許に置いたからと考えるのが自然である。御幸関係の史料であるから、靈元上皇が考え直して手許に置くこととしてもそれほど不思議ではないであろう。<sup>(31)</sup>

④は享保六年（一七二一）六月八日に中御門天皇が記したもので、後西天皇外題の五点を書き上げ、「元自「旧院」参御本之中」にあったという。この時点での「旧院」とは靈元法皇を指すと見られるので、靈元法皇の手元に後西上皇旧蔵書が残されており、それがこの時、禁裏文庫に組み入れられたということと考えられる。桜町天皇が記した6の中にも後西天皇外題と見られる書目が存するので、この時まで未整理の後西上皇旧蔵書が存在したということになる（あるいは靈元法皇崩御後に禁中に送られた書物の中に含まれていたのかも知れない）。

以上をまとめれば、後西上皇崩御後、その蔵書を接収した靈元天皇はそれを分類し、寛文六年に入手した御記箱に追加するなどして整理を進め（第二節で触れた表二を参考にすれば、その作業は完了しなかった可能性が高い）、讓位後五年を経て東山天皇に譲った。但しすべての史書を譲ったわけではなく、享保年間に中御門天皇へ後西上皇旧蔵書を送ったりもしている。一方で、必要に応じて一旦東山天皇に譲った書目を取り返すこともあった。こうした理解は、主に讓位後、靈元上皇が主導し中御門天皇・桜町天皇が継承した伏見宮本書写事業の流れ（詫間）とも合致する。<sup>(33)</sup>

次に文学書の動きについて見てみたい。酒井氏は「靈元院の歌書を中心とした蔵書は、高松宮本『歌書目録』等を参観する限り、退位後も保有し、仙洞御所に収蔵されていたと思われる。（○中略）現存本からは仙洞御所の文庫と内裏の御文庫とのいずれの旧蔵本かは峻別が困難である上、靈元院の収書活動の解明を主眼とする本稿の性格からも、靈元院

は所蔵の歌書を退位後も接収し、以後の東山・中御門天皇が独自に公家から献上させ、収書していたというアウトラインを示すに留めたい。」（酒井 a 二六二頁）と述べており、H一六〇〇―九九〇『歌書目録』の記載を根拠にして靈元天皇が讓位後も文学書を保有し続けたと推測された。この高松宮本『歌書目録』は『新類題和歌集』編纂のための諸歌集からの和歌抜書作業点検帳簿と考えられる（酒井 a）が、禁裏本を借り出して作業を行なうことも論理的には可能なので、靈元上皇が讓位後も文学書を保有し続けたと推測することの根拠としては必ずしも充分ではない。しかし二節で検討したように、靈元天皇の在位中の文学書目録である『禁裏目録』（i）、そして『歌書目録』（ii）、靈元天皇等筆『歌道目録』（iii）、靈元天皇筆『仙洞歌書御目録』（iv）といった讓位後の目録を眺める限り（次節で取り上げる『禁中へ御渡物目録』も参照）、基本的に酒井氏が推測する如く在位中の蔵書をそのまま仙洞に引き継ぎ、増補していたと考えて問題なからう。これら諸目録を詳細に検討することによって、東山天皇・中御門天皇に譲った文学書がどの程度の分量であったかが推測できる可能性があるが、それは今後の課題としたい。<sup>(34)</sup>

## ⑥ 靈元法皇から中御門天皇・職仁親王への蔵書の移動

靈元法皇の蔵書は諸親族や臣下への形見分けを除いては基本的に中御門天皇と皇子有栖川宮職仁親王へ賜与されることとなった。

中御門天皇への贈賜は靈元法皇崩御後の享保一七年（一七三二）一月である。これについては詫間氏が『宗建卿記』同月一日・一八日条と勅封一八四―七七『禁中へ御渡物目録』（外題「禁中様へ参りし物共の覚かき」）を、酒井氏が『光榮卿記』同月二六日条を紹介している（詫間、酒井 a b）。このうち最も詳細な内容がわかるのは『禁中へ御渡物目録』であり、詫間氏は部分的に紹介しているのみなので、ここで同目録

の全文を掲げることとする。

〔後筆〕  
十一月十一日  
「こん中様上ル、」  
くろぬり  
一、甲乙 二箱  
一、命記 一箱  
一、大嘗会記 一箱  
一、新熊野雑々 一箱  
一、祓 一箱  
一、八講之条々 一箱  
一、皇代暦第 一箱  
一、紹運録 一箱  
一、楽道 一箱  
一、一代要記 一箱  
一、一代要記 一箱  
一、神楽 一箱  
一、秘 一箱  
〔十月〕  
十一日  
御伝授御長持 三さほ  
照高院箱 六  
日野半ひつ 一  
十三日  
なかもち 三さほ  
内七十二色外二もくろく有、  
しゅんけい御長持 二  
内四色 氷甲乙二たんす  
れん歌一たんす  
歌書 一たんす

〔2丁オ〕

〔1丁ウ〕

〔1丁オ〕

なし地御長持 二

内八色

小から御太刀  
銀御はんさうつものたらい  
同御子のこしかけ  
同御香ほん 小道具有、  
同御すゝり箱  
同御てうしひさけ  
金御さかつき

〔2丁ウ〕

銀  
御いか

十八日

四季恋雑小大御たんす 十八たんす

氷□たんす

〔この一行墨抹〕

元和以後御たんす 一

寛文三年以来 一たんす

御記六はこ 廿三

右おもてより

一文字御半ひつ 二  
しゅんけい白桐

内八■ツ

歌書抄物一たんす

古一たんす

古二たんす

入薫上 二箱

一文字二御□□の

くり色小

御たんす

廿日

御なかもち 一さほ

内和歌書一たんす

歌書抄物一たんす

和歌雑々一たんす

動植品彙事類一たんす

左伝 一たんす

四海入海 二たんす

〔4丁オ〕

〔3丁ウ〕

〔3丁オ〕



大明図 一箱  
 御太刀 三ふり一箱  
後白河院宝剣  
 御賀丸

右ハ「御内義より」  
(女二カ)りんカ  
 (三)宮様(三)きう寺様御持参也の上に貼紙訂正  
 (4丁ウ)

廿三日

一、御記六箱  
くろぬり一  
 しゆんけい二  
 桐白木二  
 何れもあし有 五合

一、永の字  
御詠草也、  
 御長持 一さほ

一、女ほう奉書の箱 一箱

右ハ一乗院様御持参也、

十月廿八日

一、太平御らん一たんす

一、太平広記 一たんす

一、文苑英華 一たんす

一、玉海 二たんす

一、三才図絵 一たんす

一、百川学海 一たんす  
(以下、ママ)

一、文献通考 一さつ  
(考)

一、七経孟子文補遺 十さつ  
(考脱カ)

一、冊府元龜 四さつ

一、唐類函 一さつ

一、月令広義 二さつ

一、居家必用 一たんす

右の分返し  
上ル、  
 (6丁ウ)

十一月九日

一、御茶つば  
松枝  
 玉すたれ  
 (花) 三つ

十日

一、御遊 一箱 一、まり 御たんす  
(7丁オ)

一、女ほう日次一ふんこ 一、凶事方 一箱  
(7丁ウ)

一、年中行事 二箱 一、洞裏日次 一箱  
(7丁ウ)

第二丁の「十一日」は託問氏の指摘の如く一〇月と考えられ、冒頭

第一丁は後から付け加えられたものと見られる。史書関係では一〇月一八日に「御記六はこ」二三合の他、二三日に同じく「御記六箱」五合、一月九日に「御遊」「まり御たんす」「女ほう日次」「凶事方」「年中行事」「洞裏日記」、二日に「冊命記」「大嘗会記」「新熊野雑々」「祓」「八講之条々」「皇代曆」「紹運録」「楽道」「一代要記」「神楽」「秘」が進上されている。これらの中には「一代要記」等、後西上皇旧蔵書の中から分置されていたと見られるものがある一方、「冊命記」や「新熊野雑々」など新たに霊元天皇が設けた箱もあった。

前節でも検討したが、史書に比べると、文学書は大部分、霊元法皇が崩御時まで所持したままであったように思える。「照高院箱」とは後陽成天皇皇子道晃法親王(延宝七年(一六七九)六月薨去)あるいは後西天皇皇子道尊法親王(宝永二年(一七〇五)九月薨去)の旧蔵品であろう。『宗建卿記』の記事では「白河和歌伝授函 六合／照光院御授也、有子細、被納院云々」と記される。勅封一一三・四・二・二九は道晃法親王筆『入木並歌道目錄』(外題「仙洞之上置目錄 合点ノ分除之、」)であるが、その奥書に、

右之目錄者官庫秘中秘、輒雖不被許外見令拜借、遂書写之功了、朝恩何事如之、雖弟子直不可附属、道晃臨命終之節、令函封一必可返進者也、為後証言上如斯而已、

道見

と見えることと重ね合わせると、道見法親王と考えた方が良いかも知れない。

『禁中へ御渡物目録』には、「太平御らん」等漢籍についての記載も見えることも重要であるが、もう一つ注目すべき点は、禁裏に進上された書目の中に「御内義」「おもて」からだけでなく「女二宮様・りんきうし様御持参」(一〇月一八日)「一文字御半ひつ」(一乗院様御持参)(一〇月二三日)「御記六箱」「永の字」「女ほう奉書の箱」と見えるものがあることである。「女二宮」とは皇女栄子内親王(二条綱平室)、「りんきうし」とは林丘寺で皇女元秀、「一乗院」とは皇子尊賞法親王のことである。この記述から考えるならば、一旦、これらの皇子女に形見分けされた後、中御門天皇に献上されたということになる。寛文六年後西上皇進上書は別として、必ずしもその他の書物については、靈元法皇は天皇に相伝すべきであるとは考えていなかったのである。なお、皇子女に対する形見分けの目録として勅封一八四一七六『御遺物御配目録』と勅封一八四一七八『靈元天皇御遺物御配目録』があるが、その中には先の返上書に関する記述は見えない。<sup>(36)</sup> 書籍・書跡関係では栄子内親王へは「後鳥羽院御懷紙 霧隔遠山」や「京極黃門消息 所望事」「定家卿筆 明月記切」「皇太子元服記 花園院宸翰」「尚齒会詩」「長恨歌 尊円筆」「御幸記 六条有光卿筆」等、元秀へは「風雅集序 尊円筆」「後奈良院 和歌題」「網代組 古詩」等、尊賞法親王へは「阿仏二枚文 法華經」「行尹卿筆 九夏三ふく」「衣笠内大臣家良公真跡」「伏見院勅筆 為經卿加筆」「後柏原院た、今の」「後小松院」「後京極消息 昨日」「後西院 御色紙」「祝枝山字卷」「中将姫筆 經」「弘法大師經」「朗詠上下 行能卿筆」「拳天誥命」「舞のうつし」等が配られている。次に有栖川宮職仁親王への形見分けについて、勅封一八四一七六『御遺物御配目録』に職仁親王へ賜与された遺物が書き上げられているが、その中に見える書籍・書跡(の可能性のあるもの)としては「三ふく対

中納言範定卿、後鳥羽院、西園寺入道相国、「家隆卿消息 定家卿加筆、新古今之事」「後奈良院 八代集巻頭歌」「光明峯寺撰政筆 絶句一首、自作也」「為家筆 狭衣詞」「朗詠 行成真蹟」「詩歌 後奈良院勅筆写、兵部宮写、」が挙げられる。このうち「後奈良院 八代集巻頭歌」がH一六〇〇一六三五に、「朗詠 行成真蹟」がH一六〇〇一一四七に相当しよう。

高松宮本の大部分を形成する書籍類はこれとは別に贈られたらしく、詫間氏が指摘されるように『有栖川宮日記』享保一七年一〇月一七日程に「御旧院分御書物筆筒来、神書・延喜式・公卿補任等也、」二八日程に「從御旧院御書物筆筒四つ、」一一月二〇日程に「御旧院分御長持四棹来、」と見えている。<sup>(37)</sup> 詫間氏はH一六〇〇二一八『靈元院御製草案』に享保一七年四月までの靈元法皇御製が収められていることから、有栖川宮家への移動はそれ以降のことであり、法皇崩御後に行なわれたと考えられている。妥当な見解であるが、一方で、靈元上皇からの大規模な賜与はこの時に限られなかったのではないかという疑いもある。それは『有栖川宮日記』に見える虫干し記事からの推測である。同日記享保一四年(一二二九)九月一八日程には「一、御書籍虫干、」翌一九日程には「一、御懸物類虫干、御拝領之御本共、」と見え、「御拝領之御本」が虫干しされている。<sup>(38)</sup> 誰からの「御拝領」なのか明瞭でないが、まずは靈元法皇を想定すべきであろう。これ以前の書籍虫干し記事を見ると、享保一二年の段階では特にそのようなことは記されておらず(有栖川宮日記同年八月九日・一〇日程)、それ以降のことと考えられる。<sup>(39)</sup> だとすれば、靈元法皇から職仁親王への書籍譲渡は享保一二(一四年頃と靈元法皇崩御後の二度が考えられるということになるであろう。<sup>(40)</sup>

ちなみに職仁親王は靈元天皇の第一七皇子として正徳三年(一一七三)に生まれ、享保元年(一一七六)九月有栖川宮第四代正仁親王の薨去を承けて、同年一〇月有栖川宮を相続することとなった。一二年(一二二七)には一五歳を迎え、三月二日、仙洞御所において元服、中務卿に任じられ、

一月には二条吉忠女淳子と婚礼を挙げている（職仁親王行実一―一四頁）。同年には法皇より仙洞北御殿を賜わってもおり（職仁親王行実一四頁）、この時期に書籍が譲渡されることは十分に考えられるであろう。

『記録目録』（Ⅵ）が享保元年以降に靈元法皇より職仁親王に贈られた史書類一三箱の目録であることは、小倉真紀子氏によって明らかにされている（小倉（真）a b）。小倉真紀子氏はa論文において、当目録に記載された書籍が、①靈元上皇の仙洞御所から有栖川宮家に移された可能性、②仙洞御所より一旦、禁裏に移され、その後、元文二年（一七三七）より前に有栖川宮家に移された可能性、③仙洞御所を経ることなく、元文二年以前に禁裏より有栖川宮家に移された可能性、の三つの可能性を考えられたが、先に考察したように、靈元天皇が讓位後しばらく史書類を東山天皇に渡さず、そのまま所有していたことは確実なので、③の可能性は考慮しなくて良いであろう。そして②の可能性も皆無では無いが、少なくとも二度にわたって靈元法皇から職仁親王に書籍が譲られたことが確実であることからすれば、①の可能性が最も高いと見て良い。目録の表紙に張られた押紙に「此御本御所今来り候記録御目録也、／土用干之節御記録ニ可<sup>レ</sup>入者也、」とある「御所」については一般的には天皇の御所を指すと考えるべきであろうが、職仁親王の立場を考えれば、仙洞御所を単に「御所」と記した可能性も十分に考えられるであろう。この書籍移譲が靈元法皇生前なのか崩御後の形見分けなのか、判断し難いが、靈元上皇から天皇への書籍移譲が史書を先としたこと、形見分けであれば押紙の文面のような表現はとらなかったのではないかとも思われることからすれば、従来推測されていたような崩御後の形見分けではなく、靈元法皇存世中の賜与であった可能性が考えられよう。そしてこれも可能性に過ぎないが、H一六〇〇―一五〇『中右記拔書』・H一六〇〇―一二二『薩戒記』等、『記録目録』（Ⅵ）に掲載されていない（靈元天皇由来の）高松宮本史書が崩御後に職仁親王のもとにもたらされた

ものであったのではないか。

一方、文学書についてはやはりいつ職仁親王に賜与されたのかを明らかとすることは難しいが、先に『靈元院御製草案』について詫間氏の見解を紹介したように、崩御後の形見分けの中に含まれていたことはほぼ確実である。この他では、H一六〇〇―一二五七『古今金玉集』は享保九年（一七二四）三月に靈元法皇が自ら書写した写本であり、この書もそれ以降に職仁親王の手に渡ったということになる。またH一六〇〇―三〇四『象詩歌』は享保一四年（一七二九）四月に入京した象を観覧した時に詠まれた詩歌を記したものであるから、靈元法皇由来の書物であれば、それ以降ということになる。

この点については、今後、精査が必要であるが、一つの目安として『歌道目録』（Ⅲ）と勅封一〇四―三―一―三中御門天皇筆『歌書御目録』（Ⅴ）を比較してみると、その書目には出入りがあるが、このうち前者に存して後者に存しない書目のうち、九〇部以上は現高松宮本に比定される<sup>(4)</sup>。これらの書目がどのような意図に基づいて選ばれたのか、筆者は判断する能力を持たないが、少なくともある意図をもって選別されたものであることは疑いない。となれば、靈元法皇生前の移譲があったか、あるいは生前にあらかじめ職仁親王に形見分けする書物を選んでおいたかのどちらかということになる。

## むすび

六節にわたって、後西天皇収集書が靈元天皇を経て、中御門天皇と有栖川宮職仁親王に引き継がれていく過程をたどった。第一節では、寛文六年（一六六六）に後水尾法皇の命によって後西上皇が靈元天皇に諸記録新写本を七〇合を進上したが、その中には古写本や文学書は含まれておらず、それらは後西上皇の手許に残された可能性が高いことを指摘し

た。第二節では、まず後西上皇が生前に作成した史書関係の蔵書目録草稿に検討を加え、それらは貞享二年（一六八五）の後西上皇崩御後に靈元天皇が接収し、さらに再整理を行なったこと、一部は崩御前に近衛基熙に賜与したこと、文学書についても靈元天皇が接収し、自らの蔵書中に組み込んだことを明らかにした。第三節では後西天皇皇子幸仁親王が後西上皇旧蔵書を入手した時期について検討を加え、後西上皇の生前もしくは崩御時と考えるべきことを論じた。第四節では、後西天皇が禁裏本の副本作成作業を行なったのは、禁裏の火災に備えてのものではなく、讓位後も自分の手許に置くことができる蔵書を増やすためであったのであり、第二節で検討した後西上皇作成の史書関係蔵書目録草稿掲載書目は、最終的には、幸仁親王（もしくは同じく後西天皇皇子八条宮尚仁親王）（および一部は近衛基熙）に譲るつもりであったと考えるべきことを論じた。第五節では、勅封一三〇一―一六『御入記目録』の検討により、靈元天皇は後西上皇旧蔵史書を接収した後、それを分類して寛文六年後西上皇進上本に加える作業を行なったこと、しかし完全にその作業は完了しないまま、讓位後五年を経て東山天皇に譲ったこと（未整理部分は手許に残す）、その後も必要に応じて禁裏より箱を戻して書物を取り返すこともあったこと、文学書については讓位後もそのまま仙洞に引き継ぎ、増補していったと考えられることなどを明らかにした。なお、後西上皇崩御後の接収本の中には古写本が含まれていたという第一節での推測も再確認することができた。第六節では靈元法皇崩御後の書物形見分けを検討し、崩御後に中御門天皇へ贈られた書籍には『一代要記』等、後西上皇旧蔵書中より分置されていたと見られる書物が含まれており、靈元天皇による収集書も含めたかなりの量の史書・文学書がこの時、贈られていること、それらの中には他の皇子女に一旦形見分けされた後に中御門天皇に献上されたものがあること、職仁親王にはやはり美術品的価値を持つ書籍・書跡の他に「神書・延喜式・公卿補任」や靈元法皇

御製も含めた書物が贈られていること、それ以前、享保一二―一四年頃にも詳細は不明であるが、ある程度の分量の書籍が賜与されていたと見られること、『記録目録』（Ⅵ）に記載される書物が靈元法皇存世中の賜与であって、それに記載されていない史書は崩御後の形見分けと考えられる可能性があること、文学書については『歌道目録』（Ⅲ）と『歌書御目録』（Ⅴ）を比較することによって、前者に存して後者に存しない書目のかなりの部分は現高松宮本であり、少なくともある意図をもって選別された上で職仁親王に賜与されたと考えられること等を明らかにした。

なお第六節では、靈元法皇が必ずしも自分の蔵書の基幹となる部分すべてを天皇に譲るべきであるとは考えていなかったことを指摘したが、このことは近世の禁裏文庫を考える上では重要な意味を持っている。従来の研究では、ともすれば天皇の蔵書を次代の天皇が受け継ぐことは当然と見做されがちであったが、本稿で書物の流れを追った結果からも明らかのように、それは必ずしも妥当ではない。万治の大火で一旦、壊滅的な打撃を被った禁裏の文庫は、後西上皇寛文六年進上書を核としながら焼け残った書物とその後の新たな蓄積で、増加していったが、後西上皇が崩御後に自分の蔵書を縁者に形見分けしようと考えたように、靈元上皇も自分が収集した書物のすべてを崩御時の天皇である中御門天皇に譲ろうとは考えていなかった。しかし結果として有栖川宮職仁親王への譲渡分を除いて、<sup>(43)</sup>靈元法皇旧蔵書籍の主だった部分は中御門天皇の所蔵となった。そして以後は、それが拡大した禁裏文庫本として以後の歴代天皇に引き継がれることとなったのである。

このような理解は、禁裏文庫における古写本等貴重書の伝来の解釈についても影響を及ぼす。従来、東山御文庫に現存する古写本については万治の大火の焼け残りと考えられがちであった。しかしもし焼け残りであったとするならば、それは後西天皇の讓位と共に靈元天皇に受け継が



れたはずではなからうか。後西上皇が新院御所に移動させた書物については、禁裏の蔵書ではなく、自分の個人的な蔵書と考えていたことを意味すると理解すべきであろう。確かにそれら後西上皇の蔵書の中には勅封一七八―三一四後柏原天皇筆『蹴鞠口伝集』のような恐らく御所内に存在していたであろうものも存在したが、それは後西天皇自身が奥書に記しているように「自<sup>三</sup>反古之中<sup>一</sup>撰<sup>二</sup>出之<sup>二</sup>」したものであり、天皇自身が発見したものであった。後水尾天皇より拝領した書物も、天皇として拝領したわけではなく、皇子として拝領したのだから、必ずしも次代の天皇に渡さねばならないものではなかった。

最後に、靈元法皇旧蔵書の中からのような書籍が職仁親王に譲られたのかという問題について述べておきたい。この問題を明らかにするためには、残された目録に記載される書目と現存本との対比を丁寧に行なう必要があるが、大雑把な見通しとしては、大きく分けて二種類に分けられるであろう。一つは靈元天皇が意図的に選別したものであり、文学書については第六節で述べた通りであり、史書については『記録目録』(Ⅵ)に掲載された書目がそれに当たる可能性がある。どのような意図があったのかをすべて明らかにすることは難しいが、一つには『明月記』卷子本について石田実洋氏が推測された〔石田(実) c 八九頁〕ように、同じ内容の書物が複数存在する場合、一方を職仁親王に分与したのではないかと考えられる。

もう一つは、崩御時に靈元法皇の手許に置かれていた書籍のある部分をそのまま職仁親王に形見分けしたものである。具体的にはH一六〇〇―二一八『靈元院御製草案』やそれに含まれる『伏見宮殿文庫記録目録』などがそれに相当する。少なくとも伏見宮本を靈元院が書写せしめた際の目録となった『伏見宮殿文庫記録目録』(書写された写本は禁裏に伝来)が意図的に職仁親王に譲渡されたと考ええることは困難なので、これが有栖川宮家に伝来したのは偶然と考えて良いであろう。似たようなも

のとして高松宮本中の系図関係資料〔H一六〇〇―一〇五五―一三三四〕も挙げられる。これは寛文六年に後西上皇より靈元天皇に進上された書物七〇箱の内の「系図」箱に相当すると考えられるので、本来は禁裏に伝来すべきであったし、実際、『禁裡御蔵書目録』(Ⅳ)にも掲載されているぐらいである〔高田〕。これは同目録作成時に禁裏に「系図」箱が伝来していたということではなく、靈元上皇在世時のある段階において仙洞に取り戻されたが、その事実が禁裏側で把握されていなかったため、禁裏に存在していた段階で作成された目録がそのまま『禁裡御蔵書目録』(Ⅳ)に掲載され、一方、仙洞ではその経緯が忘れ去られて職仁親王へ分賜する遺物の中に紛れ込んでしまったと考えられる〔小倉(慈) b〕。これらの点を詳細に論じ明らかにするには、諸目録に記載される書目と現存本との対応関係の調査や外題筆者の確定等の綿密な調査が求められる。それらの点は今後の課題としたい。

# 註

- (1) 資料番号はH一三四、一三八、一四一―一四三、一四五、一四六、一六八。この他、H一四四の伝冷泉為相本『新古今和歌集』について高松宮旧蔵と述べられることもある〔田淵等〕が、筆者としては確認できておらず、少なくとも高松宮より文化庁が購入したものではない。
- (2) 原文は横書きで数字の表記に洋数字を用いているが、今、引用にあたり漢数字に改めた。この後、一九九一年に刊行された『国立歴史民俗博物館蔵資料概要』には、「元来は禁裏に伝来し、後水尾、後西、靈元各天皇が蒐集、書写された禁裏御文庫であったが、有栖川宮を後西天皇皇子幸仁親王、靈元天皇皇子職仁親王が継承された際に移譲され、有栖川宮歴代親王によって愛蔵された。」と記される〔三七頁〕。
- (3) 小川氏はH一六〇〇―二四五―三『部類記等記録目録』について、後西天皇が讓位にあたり収集新写した書目であり、この寛文三年時に進上した目録と推測された〔小川 a b〕が、この目録の中には『脱履部類記』古写本など後西上皇崩御時まで上皇の手許にあったと考えられる書物も含まれており〔表二参照〕、そのように考えることは難しい。
- (4) 張即之の書か。勅封一八四―七八『靈元天皇御遺物御配目録』には妙門(靈元

天皇皇子堯恭親王<sup>(一)</sup>への遺物として「即之白日一卷」、知恩院(靈元天皇皇子尊胤親王<sup>(二)</sup>)への遺物として「即之筆大字長公子一」<sup>(三)</sup>が見える。

(5) 以下、本稿では、わかりやすく記述するため、歴代天皇の呼称に関して、特に讓位後の時期に限定して使用する場合には「上皇」もしくは「法皇」と表記することとする。

(6) 「日次記以下御目錄」(Ⅴ)が「禁裡御藏書目錄」(Ⅳ)と連れの目録と考えられることは、田島a論文補注10参照。筆者はこの後、原本にてこの点を確認している。田島a論文の修正点については、酒井e論文注(2)に指摘されるように、48系図、49諸家伝は現高松宮本に含まれると考えられる(ただし「禁裡御藏書目錄」(Ⅳ)の系図項(酒井e論文に翻刻されるが、残念ながら誤りが多い。「禁裡御藏書目錄」(Ⅳ)全体の翻刻として山崎論文もある)に見える書目すべてが高松宮本として伝来するわけではない。例えば国治筆「津守氏系図」は現書陵部蔵本(函架番号四一四八)に相当すると考えられる。これは寛文二年(一六七二)に津守国治より後水尾法皇に献上されたものである(同史料については「圖書寮典籍解題」歴史篇二〇九―二一〇頁参照)。他に菅氏系図も「明暦」印を持つ書陵部蔵本(函架番号四一五―一八九)に該当する可能性が高い)。また39山槐記は勅封9(一四)のみに対応すると考えた。なお、後述するように、対応する現東山御文庫本の函のすべてがこの寛文六年時に後西上皇より進上されたというわけではなく、その後に追加されたものも存在する。

(7) この後、天和三年(一六八三)四月一六日に後西上皇より靈元天皇に古今伝授が行なわれ、後水尾天皇相伝の切紙二四通と後西筆「伝心抄」四冊(勅封六二―一二二―一二三)が進上された(海野、酒井d)。また貞享元年(一六八四)一月一六日には源氏物語切紙を伝授している(「基熙公記」)(この時の切紙かどうか定かでないが、勅封六八―七―七三の中に後西天皇筆の源氏物語伝授切紙が含まれている)。また靈元天皇の事例(「靈元天皇実録参照」)から推測すれば、御幸その他祝儀として書物が贈られることも度々あったことであろう。

(8) そもそも崩御以前より上皇御所には靈元天皇の内意を承けて清閑寺熙房と西洞院時成が伺候していたという(「基熙公記貞享二年二月二五日条(註(9)参照)」。)

(9) 「基熙公記」には以下のように見えている。  
貞享二年二月二三日条より  
前平中納言・宮内卿兩人以<sup>(平松時成)</sup>岡部伯耆守<sup>(盛次)</sup>年来從<sup>(盛次)</sup>関東<sup>(盛次)</sup>被<sup>(盛次)</sup>待置<sup>(盛次)</sup>武士也、御遺書一通送之、  
同月二五日条より

從<sup>(平松時成)</sup>時量卿・保春卿兩人有<sup>(平松時成)</sup>レ状、御遺書聊有<sup>(平松時成)</sup>三子細之間、封之可<sup>(平松時成)</sup>返給旨也、不審無<sup>(平松時成)</sup>レ極、雖然無<sup>(平松時成)</sup>レ是非返遣了、旧院自<sup>(平松時成)</sup>御惱中間<sup>(平松時成)</sup>到<sup>(平松時成)</sup>今日清閑寺大納言熙房卿・右衛門督時成卿兩人有<sup>(平松時成)</sup>レ勅定伺<sup>(平松時成)</sup>候院御所、其謂者御閑眼以後、御文

庫之事等御不審之御内意之由、諸人稱之、即真実云々、雖<sup>(平松時成)</sup>凡下人如<sup>(平松時成)</sup>此事心中雖<sup>(平松時成)</sup>有<sup>(平松時成)</sup>レ之可<sup>(平松時成)</sup>遠慮<sup>(平松時成)</sup>事也、尊為<sup>(平松時成)</sup>天子令<sup>(平松時成)</sup>如<sup>(平松時成)</sup>此<sup>(平松時成)</sup>敬慮<sup>(平松時成)</sup>可<sup>(平松時成)</sup>悲々々、委細為<sup>(平松時成)</sup>後代東西之間、不<sup>(平松時成)</sup>能<sup>(平松時成)</sup>レ記、仍時量・保春兩卿觸<sup>(平松時成)</sup>諸事<sup>(平松時成)</sup>難義云々、

(同年二月記は二種類存在するが、ここでは草稿本(二二九四九号)から引用した。書直本は若干表現が簡潔になっている)

(10) この後、三月七日に兵部卿宮(幸仁親王)、員宮(後西天皇第八皇子で第一皇子八条宮長仁親王の跡継、後の尚仁親王)と毘沙門堂宮(後西天皇第六皇子公弁法親王)、近衛基熙、平松時量と高野保春に遺書が渡されている(「基熙公記同日条」)。

(11) ちなみに註(9)で触れた「基熙公記」草稿本は貞享二年正月より三月の一冊であるが、正月分二五丁はすべて文字の重ね書きによって抹消され、判読不能な状態とされている。古今伝授宮については、靈元法皇崩御後の「光榮卿記」享保一七年一〇月一六日条にも「諸<sup>(實仁親王)</sup>有<sup>(實仁親王)</sup>栖川宮<sup>(實仁親王)</sup>、自<sup>(實仁親王)</sup>今御稽古御詠弥可<sup>(實仁親王)</sup>申<sup>(實仁親王)</sup>愚存<sup>(實仁親王)</sup>義、頃<sup>(實仁親王)</sup>日中院<sup>(實仁親王)</sup>・武者小路武者小路共旧院仰旁兎角可<sup>(實仁親王)</sup>堪<sup>(實仁親王)</sup>御命<sup>(實仁親王)</sup>由<sup>(實仁親王)</sup>、被<sup>(實仁親王)</sup>申承<sup>(實仁親王)</sup>間、不<sup>(實仁親王)</sup>顧<sup>(實仁親王)</sup>愚意<sup>(實仁親王)</sup>可<sup>(實仁親王)</sup>申入<sup>(實仁親王)</sup>由<sup>(實仁親王)</sup>申之、此次道之義多端申入、又宮御物語多端也、旧院古今御伝授宮等義也、不<sup>(實仁親王)</sup>可<sup>(實仁親王)</sup>悉<sup>(實仁親王)</sup>記、猶載<sup>(實仁親王)</sup>風雅日記<sup>(實仁親王)</sup>了、」と話題になっている。

(12) また、靈元天皇自身が不足に気づいたのであれば、12にその書名が記されてしかるべきであろう。

(13) 漢籍類についてはさぐる手がかりをほとんど見出せていないため、今後の課題としたい。

(14) この他、一九四二―四三年頃に図書寮図書課整理係が猪熊信男氏を招請して図書寮蔵書中の旧禁裏本の筆者について鑑定した際の記録である早稲田大学図書館所蔵伊地知鐵男文庫「宸筆調査目録」(文庫二〇一五八五)には、「明暦」印や後西筆の外題がある等、後西天皇に関わる書籍が八十数点指摘されている(他に同書に掲載されない「明暦」印を持つ書籍も数点存在する)。

(15) 久保本氏は、史書類の進上とはほぼ同時期の「寛文六年前後とみておくのが穏当なように思われる」と述べられている(久保本a)が、積極的な根拠があるわけではなさそうである。

(16) 酒井a論文は「元禄末年頃の成立とされる(○筆者註、註として福田論文を掲げる)東山御文庫本「歌書目録」(勅封一〇二―一〇三―一三八)と述べる(酒井d論文にも同様の記述あり)が、福田論文で元禄末年頃の禁裏御文庫の蔵書状態を示しているとする「歌書目録」は、外題桜町天皇筆の勅封一〇五―七―一六八「歌書御目錄」(Ⅵ)のことである。勅封一〇二―一〇三―一三八「歌書目録」(Ⅱ)は福田論文注(3)の記述によれば、福田氏自身は調査できなかったらしく、「桂宮本叢書」二〇所収「桂宮本叢書」の称呼について「の記載によつて、『歌書御目錄』(Ⅵ)の直接の祖本らしいと推測されている。小川剛生氏も『歌書目録』が元禄一四年頃と言われていると述べている(小川b)が、酒井論文を承けたものであろうか。

- (16) その一行前に「水日集」も行間追記されている。
- (17) ちなみに雑賀の中の「浜木綿」が現書陵部五〇一四三六であるとする、同書は享保七年(一七二二)の写本なので、本目録もそれ以降の成立となる。
- (18) 但し「仙洞歌書御目録」は勅封六九一五・六の史料名でもあるから、勅封六九一五・六一二を「仙洞歌書御目録」と呼ぶこと自体は必ずしも誤りとは言えない。
- (19) 有栖川宮家蔵書についてはこれ以前、有栖川宮家創立時に天皇より蔵書が譲られたとの説(小池)、また初代好仁親王が後陽成天皇より拝領した書籍があるとの見解(武田)がある。これはあり得べきことではあるが、それを裏づける史料は見出していない。
- (20) 本稿の内容に関連する口頭報告を国際日本文化研究センター共同研究「日記の総合的研究」(倉本一宏代表)研究会(二〇一一年二月二〇日)で行なった際、幸仁親王は後西天皇と仲が悪く、むしろ霊元天皇との関係が良好であったから、霊元天皇から賜与されたと考えざるべきではないかとの意見をいただいた。
- (21) 酒井d論文に表一として三三点が掲げられており、他にH一六〇〇・九二四「続草庵和歌集」が加えられる。なお「高松宮家伝来禁裏本目録」(国立歴史民俗博物館 二〇〇九年)では、H一六〇〇・七三二「人三臣和歌」について「明暦」印と「幸」印の印記記載が漏れている。
- (22) 酒井氏は「幸仁」印を持つH一六〇〇・五七〇「宗良親王千首」(外題「信太社千首」)について、「元禄末年頃成立とされる東山御文庫本『歌書目録』(勅封一〇二一・三三八)に、  
為家千首 一一  
信太(ママ) 一一  
為尹千首 一一  
と見える。」と述べられている(「酒井d」が、『歌書目録』(ii)にこの記載は見えない。註(15)の事例に照らせば、これも勅封一〇五・七・六八外題「桜町天皇筆『歌書御目録』(vi)」を誤ったものであろう(ただし同目録には「信太」の下に「社」字がある)。同様の記載は外題「霊元天皇筆『歌道目録』(iii)および勅封一〇四・三・一一三中御門天皇筆『歌書御目録』(v)」にも見えるので、酒井氏が考えるようにこの書目が現高松宮本に相当するのであれば、幸仁親王の蔵書とされた後、霊元天皇のもとに戻り、中御門天皇・桜町天皇に受け継がれ、その後、ある段階で幸仁親王の蔵書となったという複雑な動きをたどった(もしくはある段階で幸仁親王の蔵書になったにもかかわらず、霊元上皇・中御門天皇・桜町天皇の蔵書目録に転記され続けた)ことになる。しかし宮内庁書陵部所蔵「詠千首和歌」(五〇一・七七四)の外題は後に補筆されたものと見えるので、剥離した題簽に付されていた同書の本来の外題が「信太社(千首)」であったという可能性が考えられるし、そうでなかったとしても、目録掲載本は現高松宮本とは
- 別書であり、ある段階で禁裏文庫より流出した可能性を考えた方が自然ではなからうか。
- (23) このときに貸し出している『岷江入楚』が現高松宮本であるのかどうかは定かでない。なお「明暦」印を持つ『岷江入楚』が現在、毘沙門堂に伝来している(木村真美子氏の御教示)。
- (24) 「明暦」「幸仁」印が捺されるH一六〇〇・五一〇に相当すると思われる。
- (25) 野村玄氏は「記録進上の実現までに時間を要している点については、文庫の修復と後西上皇御所の建設に寛文四年(一六六四)までかかっており(○中略)、そのことが影響したものと思われる」と説明するが、『葉室頼業記』寛文六年二月二六日条・三月二四日条に記される後西上皇の不满(第一節参照)、また寛文六年の進上後も古写本は所持し続け、さらに新たな写本も作成していること(第二・三節、また平林論文等参照)などから考えても、従えない。
- (26) 後西上皇崩御後、霊元天皇はその追号を自ら選定した。「後西」とは西院帝と呼ばれた淳和天皇にちなんで付けたものであるが、その理由の一つに淳和天皇の子孫が皇位についていないことを挙げている(兼輝公記貞享二年二月二九日条)。霊元天皇の後西上皇に対する姿勢を示す一例と言えよう。
- (27) 宮内庁書陵部所蔵江戸写本によった。酒井a論文二六頁、b論文二九頁の翻刻とは異なる。酒井氏の翻刻がどの写本によったものであるのか不明であるが、本引用の方が文字数が多いので、とりあえず酒井翻刻の脱字・脱文と判断しておきたい。
- (28) 但し実際には目録のみの進上で、書物が完全に進上されたのは、禁裏の文庫の増築が完成してからであった(石田(俊))。石田氏はこの時期に禁裏文庫の目録進上が行なわれた理由として、東山天皇の親政開始に向けた準備作業と解されている。なお酒井氏は、石田俊氏の批判に対し、即位時とは別に元禄五年に霊元上皇所持本を進上したと解釈されたようである(「酒井b注(6)」が、本文で述べたように解釈しておきたい)。
- (29) 『勸慶日記』元禄五年六月二七日条には国史部類・年代記類・律令格式の箱を取り寄せたことが見え、『光榮卿記』享保四年四月一日条には、「依召参内、御記録宮諸社二三・四・諸社祭・番衆所日記、以上五合従御文庫取出可<sub>(中略)</sub>献由、被<sub>(中略)</sub>仰出、議奏兼親卿、則伴<sub>(中略)</sub>俊将<sub>(中略)</sub>、当番、向御文庫、取出上了、(○中略)兼親卿云、猶晚刻可<sub>(中略)</sub>被<sub>(中略)</sub>返納<sub>(中略)</sub>間申刻可<sub>(中略)</sub>参云々、則退出申刻参内処、諸社二・四・諸社祭・番衆所日記、以上四合、公卿補任一檐子、可<sub>(中略)</sub>納御文庫、由被<sub>(中略)</sub>仰出、則伴<sub>(中略)</sub>敦孝<sub>(中略)</sub>、当番、行<sub>(中略)</sub>向御文庫、納置了、諸社三被<sub>(中略)</sub>留<sub>(中略)</sub>御前云々」と見え、「諸社二三・四・諸社祭・番衆所日記」の箱と「公卿補任一檐子」が禁裏文庫にあったことが判明する。なお、言うまでもないが、『葉室頼業記』に名前が見える箱でもその後に書物が追加されている場合があり、逆に新たに加えられた箱の中に後西上皇旧蔵



書が入っている場合もある。

- (30) なお勅封一三〇一―一三についてはかつて原本調査を行なった際、爪点の存在を確認しているが、調査メモに不十分な点があったため、今回、言及することは控えた。

- (31) なお宝永四年(一七〇四)段階の禁裏文庫の目録とされる菊亭本『禁裏御記目録』や勅封五九一三―一二中御門天皇ほか筆『御文庫記録目録』乙(Ⅱ第一冊)には②と同内容が記され、一二冊不足のことは記されていない。これはこれらの目録を作成した時には現物が確認できたということではなく、それ以前に存在した目録をそのまま書き上げて作成したためと考えるべきであろう。したがって目録に書目が見えることは、必ずしも現物の存在を意味しないという点、注意しておきたい。なお、『禁裏御蔵書目録』(Ⅳ)ではやはり②について④・⑥を書き上げた後、③を年月日部分を除いて写している。

- (32) この点は次節で触れる『光榮卿記』享保一七年一〇月二六日条の記事からも明らかである。

- (33) 詫間氏によれば、伏見宮本の写本は靈元天皇讓位後のある時期まで仙洞御所と内裏とに分かれて存在していた(詫間註(9))。石田実洋氏によって明らかにされた冷泉家次第書写事業(石田(実)a)も、恐らくは同氏の推測通り、靈元天皇の讓位前後の時期に行なわれたものと見てよからう。

- (34) 酒井氏は『光榮卿記』享保三年(一七一八)二月二五日条の「依召参内、御歌書御長櫃二合納御文庫了」という記事を挙げて、靈元上皇から禁裏御文庫への歌書の移動と見做している(酒井a二六一頁)。その可能性も考えられるが、別の解釈も成り立ち得るので、この記事については可能性の指摘だけに留めておきたい。なお、靈元天皇の歌書書写活動については酒井a c 論文参照。

- (35) 「授」の字は詫間論文註(11)の翻刻では「控」、東京大学史料編纂所所蔵二〇七三―二〇九や同所蔵押小路本一む一4、宮内庁書陵部所蔵三五〇―一五五では「掟」。

- (36) 元秀に対しては、「大ふんこ」が賜与されているが、書かれている位置から判断して、いわゆる手箱そのものと考えられる。

- (37) この他、行平御太刀・御硯文台・御厨子棚・屏風・網代御輿等も贈られている(有栖川宮日記、職仁親王行実二二頁)が、「御遺物御配御目録」には見えておらず、この関係は不明である。

- (38) 二〇日にはさらに「御拝領之御装束」も虫干しされている。

- (39) 享保一三年の『有栖川宮日記』は七―一二月分のみが現存し、その中に書籍虫干し記事は見られない。

- (40) もちろん少量の賜与はこれ以外にも存した。たとえば『有栖川宮日記』によれば享保六年一二月一二日に「青蓮院宮御筆拾要抄一冊」や絵画を拝領しており、

日一六〇〇―一六五〇『靈元院御製懷紙』は箱蓋裏書等を参考にすれば、享保一四年職仁親王王子音仁親王七夜および同年一月一二日法皇御幸の際に賜わったものと考えられる(辰翰英華九二六・九四〇)。

- (41) 全体の構成を比較すると、①前者には冒頭に箱や櫥子の目録があるが後者にはない、②それに続いて前者は春・夏・秋・冬・恋・雑(以上大小あり)、雑春・雑夏・雑秋・雑冬・雑恋・雑賀、和歌抄、歌書抄、和歌雑々、の櫥子で構成されているが、後者は雑賀までで終わる、③雑冬までの書目はほぼ対応している(増減あり)が、雑恋以下は単純に対応せず、組み替えが行なわれている、といった相違点がある(前者の雑恋以下に掲げられた書目で、後者の雑冬以前に入れ替えられた書目も存在する可能性があるが、精査するに至っていない)。

- (42) 春大(雑冬までは書目に不審紙が付された各櫥子末尾部分がほぼ高松宮本に相当する(その他にも若干高松宮本に相当する書目が存在する)。冒頭の箱・櫥子部分や雑恋以下は不審紙との対応関係は明瞭でない。『歌書御目録』(Ⅴ)に見えない書目の中には宮内庁書陵部御所本に相当するものもあり、それは別置されたことを意味するのではないかと推測される。

- (43) 職仁親王への讓渡分が例外的存在となったことには、本来、有栖川宮家に伝わるべきであった後西上皇旧蔵書を靈元天皇が接収したと関連する可能性がある(ちなみに『宗建卿記』享保一七年一〇月一日条には、靈元法皇の「日野家」と歌伝授宮「合」は子細があつて内々に靈元上皇御文庫に納められていたものであったが、この度、日野家に返却されることになったことが記される)。そうした過去の経緯があつたために、靈元天皇は有栖川宮家当主である職仁親王に一定量の書籍を譲ることとしたのであり、それが朝廷内においても当然視されたのではなからうか。

# 史料依拠写本・刊本

(本文・注で所蔵先等について言及した場合には省略)

有栖川宮日記 宮内庁書陵部所蔵原本(有栖五〇八〇)

槐記(『日本古典文学大系』96近世随想集による)

兼輝公記 東京大学史料編纂所所蔵謄写本(二〇七三―一二九)

勸慶日記 京都大学総合博物館所蔵自筆本(勸修寺家文書三七二(紙焼写真による))

堯恕法親王日記 妙法院所蔵自筆本(『妙法院史料』二の翻刻による)

禁裏番衆所日記 宮内庁書陵部所蔵(柳一七四)(紙焼写真による)

大日本史編纂記録 京都大学文学部所蔵原本(小川・大塚論文翻刻による)

時量卿御記 後西院御裏事 京都大学附属図書館所蔵自筆本(平松三二一)(京都



大学電子図書館画像による)

葉室頼業記 宮内庁書陵部所蔵自筆本〔葉一〇〇四〕(紙焼写真による)

光栄卿記 宮内庁書陵部所蔵写本〔二六〇一〕

无上法院殿御日記 東京大学史料編纂所所蔵謄写本〔二〇七三・一七九〕(自筆原本は陽明文庫所蔵)

宗建卿記 宮内庁書陵部所蔵歴代残闕日記卷二二四明治写本〔二五三一・八二〕(影印本による)

基量卿記 宮内庁書陵部所蔵自筆本〔柳五八〕(紙焼写真による)

基熙公記 陽明文庫所蔵自筆本〔元函、二二九四九号〕(紙焼写真による)

霊元上皇院中番衆所日記 東山御文庫収蔵〔勅封九三・一〕(東京大学史料編纂所作成デジタル画像による)

なお、東山御文庫本については原則としてマイクロフィルムもしくはそれをもとに

東京大学史料編纂所にて作成したデジタル画像に、高松宮本については紙焼写真もしくは館蔵高松宮家伝来禁裏本データベース画像により、一部について原本調査を行なった。

参考文獻

## 参考文献

- 石田 実洋 a 「冷泉家時雨亭文庫所蔵『朝儀諸次第』と高松宮家伝来禁裏本」『書陵部紀要』五三 二〇〇二年
- b 「『明月記』延宝奥書本をめぐって」『日本歴史』六四七 二〇〇二年
- c 「『明月記』の自筆本と転写本・逸文」『明月記研究』八 二〇〇三年
- d 「東山御文庫本『御本御目録』と高松宮家伝来禁裏本」吉岡眞之・小川 剛生編『禁裏本と古典学』塙書房 二〇〇九年
- 石田 俊 「元禄期の朝幕関係と綱吉政権」『日本歴史』七二五 二〇〇八年
- (伊地知鐵男・橋本不美男)「桂宮本叢書」の称呼について 宮内庁書陵部編『桂宮本叢書』二〇 養徳社 一九六〇年
- 海野 圭介 「東山御文庫蔵『古今集相伝之箱入目録』・同『追加』考」『古代中世文学』六 新典社 二〇〇一年
- 小川 幸代・大塚統子「大日本史編纂記録(二)」「神道古典研究所紀要」七 二〇〇一年
- 小川 剛生 a 「高松宮家伝来の禁裏文書について」「中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究——高松宮家伝来禁裏本を中心として——」研究プロジェクト編・発行『中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究 研究調査報告』一二〇〇七年
- b 「禁裏本・禁裏文庫について」『語文』一二九 二〇〇七年

c 「『西面御文庫宸翰古筆並和漢書籍総目録』(宮内庁書陵部蔵有栖川宮本)」吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』塙書房 二〇〇九年

小倉 慈司 a 「高松宮家伝来禁裏本」の来歴とその資料価値——歴史資料を中心に——国立歴史民俗博物館資料目録「八一・二」「高松宮家伝来禁裏本目録」奥書刊記集成・解説編 国立歴史民俗博物館 二〇〇九年 初出二〇〇七年

b 「高松宮家伝来禁裏本について」中部日本放送編・発行『宮廷の雅』二〇一一年

小倉真紀子 a 「近世禁裏における六国史の書写とその伝来」田島公編『禁裏・公家文庫研究』三 思文閣出版 二〇〇九年 初出二〇〇六年

b 「『記録目録』(国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本)吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』塙書房 二〇〇九年

宮内省図書寮編『霊元天皇実録』一―三 ゆまに書房 二〇〇五年 原本刊行一九三六年脱稿

宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題』続文学篇 養徳社 一九五〇年

『図書寮典籍解題』歴史篇 養徳社 一九五〇年

宮内府図書寮編『図書寮典籍解題』文学篇 国立書院 一九四八年

久保本秀夫 a 「万治四年禁裏焼失本復元の可能性——書陵部御所本私家集に基づく」吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』塙書房 二〇〇九年

b 「万治四年禁裏焼失本復元の可能性——歌学歌論書・定数歌・歌会の場合」『武蔵野文学』五七 二〇〇九年

小池 一行 「御所本」井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店 一九九九年

国立歴史民俗博物館・資料委員会編・発行『国立歴史民俗博物館蔵資料概要』一九九一年

是澤 恭三 a 「東山御文庫御秘蔵の御湯殿上日記の由来」『歴史と国文学』一八一四 一九三八年

b 「御湯殿上日記の研究 伝播編」二『日本学士院紀要』一五―三 一九五七年

酒井 茂幸 a 「霊元院仙洞における歌書の書写活動」『禁裏本歌書の蔵書史的研究』思文閣出版 二〇〇九年 初出二〇〇五年

b 「霊元院仙洞における古記録の収書活動」『禁裏本歌書の蔵書史的研究』初出二〇〇六年

c 「江戸時代前期の禁裏における冷泉家本の書写活動」『禁裏本歌書の蔵書史的研究』初出二〇〇六年

d 「後西天皇の歌書の書写活動」『禁裏本歌書の蔵書史的研究』初出二〇〇六年

- 九年
- e 「国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本の「系図」の史料群について」『研究と資料』六三 二〇一〇年
- 杉栄三郎ほか 『職仁親王行実』高松宮 一九三八年
- 高田 義人 「『医陰系図』解題」詫間直樹・高田義人編『陰陽道関係史料』汲古書院 二〇〇一年
- 詫間 直樹 「高松宮家旧蔵『伏見殿文庫記録目録』について」田島公編『禁裏・公家文庫研究』二 思文閣出版 二〇〇三年
- 武田 勝蔵 「高松宮御秘蔵品拝観記」『中央史壇』一三・一八 一九二七年
- 田島 公 a 「禁裏文庫の変遷と東山御文庫の蔵書」大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造』古代・中世 思文閣出版 一九九七年
- b 「御本御目録」毎日新聞社「至宝」委員会事務局編『皇室の至宝 東山御文庫御物』四 毎日新聞社 二〇〇〇年
- c 「近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録」田島公編『禁裏・公家文庫研究』一 思文閣出版 二〇〇三年 初出二〇〇〇年
- 田島 公・松澤克行「お湯殿の上の日記」『東京大学史料編纂所の国宝・重文名品展』東京大学史料編纂所 二〇〇五年
- 田淵句美子 「新古今和歌集」館蔵史料編纂会『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇四 臨川書店 二〇〇〇年
- 帝国学士院編『宸翰英華』二 紀元二千六百年奉祝会 一九四四年（思文閣出版 一九八八年復刻）
- 中村健太郎 「63柿本人麿像」中部日本放送（株）編・発行『宮廷の雅』二〇一一年
- 野村 玄 「後西天皇の譲位と「天子御作法」」『日本近世国家の確立と天皇』清文堂出版 二〇〇六年 初出二〇〇四年
- 平林 盛得 「後西天皇取書の周辺」岩倉規夫・大久保利謙編『近代文書学への展開』柏書房 一九八二年
- 福田 秀一 「宮内庁書陵部及び東山御文庫の「歌書目録」について」『日本文学逍遙』新典社 二〇〇七年 初出一九六三年
- 本田 慧子 「葉室頼業記」『日本歴史「日記」総覧』新人物往来社 一九九四年
- 山崎 誠 「禁裡御蔵書目録稿（四）東山御文庫蔵『禁裡御蔵書目録』一」『国文学研究資料館文献資料部』調査研究報告』一七 一九九六年
- 吉岡 眞之 「東山御文庫本『続日本紀』の周辺」『続日本紀研究』三〇〇 一九九六年
- 和田 英松 『皇室御撰之研究』明治書院 一九三三年

〔付記〕

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金学術創成研究「目録学の構築と古典学

の再生―天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明―」（田島公代表 二〇〇七―一一年度）による成果の一部である。東山御文庫本の拝観および写真（二点）・翻刻（表形式も含め三点）の掲載を御許可いただいた宮内庁侍従職、またその他、史料閲覧を御許可いただいた各史料所蔵機関には深謝申し上げたい。

（国立歴史民俗博物館研究部）

（二〇一二年四月一〇日受付、二〇一二年五月二五日審査終了）

表一 『葉室頼業日記』の七〇箱と現東山御文庫本・『禁裡御蔵書目録』『日次記以下御目録』等との対応

番号	函内訳	員数	対応勅封番号	『禁裡御蔵書目録』『日次記以下御目録』	『御文庫記録目録』『書籍御目録』
1	続日本紀	一箱	勅封 71・72	10 続日本紀甲・乙	10 続日本紀甲・乙
2	続日本後紀	一箱	勅封 73	11 続日本後紀	12 続日本後記
3	三代実録	一箱	勅封 51-2	12 三代実録	13 三代実録
4	国史部類	一箱	勅封 37	14 国史部類	14 国史部類
5	令集解	一箱	勅封 74	17 令集解	16 令集解
6	三代格	一箱	勅封 24	16 律令格式	15 律令格式
7	類聚国史	一箱	勅封 25	13 類聚国史	
8	朝野群載	一箱	勅封 165	19 朝野群載之類	14 朝野群載之類
9	西宮北山等類	一箱	勅封 27	18 西宮北山之類	36 西宮記北山之類
10	年中行事類	一箱	勅封 41	21 年中行事	45 年中行事
11	雑々記	二箱	(対応関係不明)	(対応関係不明)	(対応関係不明)
12	恒例	一箱	勅封 128	22 恒例	
13	臨時	一箱	勅封 162	23 臨時	39 臨時
14	節会記	一箱	勅封 147	24 節会	40 節会
15	叙位記	一箱	勅封 44	27 叙位記	
16	除目	二箱	勅封 153	28 除目	
17	大間	一箱	勅封 36-5・14	29 魚魯并大間	44 魚魯并大間
18	魚魯	一箱	勅封 36-2・3 (+ 国立公文書館)	29 魚魯并大間・30 魚魯	44 魚魯并大間
19	諸社祭	一箱	勅封 127	8 諸社祭記	6 諸社祭記
20	御神楽	一箱	勅封 126	9 御神楽記	9 御神楽記
21	御讓位記	一箱	勅封 157	39 御讓位	47 御讓位
22	御即位記	二箱	勅封 141・142	40 御即位記甲・乙	
23	天皇御元服記	一箱	勅封 143 の内	36 天皇元服記	
24	親王御元服記	一箱	勅封 143 の内	37 親王元服記	46 親王御元服記
25	行幸記	一箱	勅封 130 の内	34 行幸并御幸記	
26	御幸記	一箱	勅封 130 の内	34 行幸并御幸記	42 御幸
27	改元	二箱	勅封 38・39	31 改元甲・乙	
28	辛酉甲子	一箱	勅封 148・149	33 辛酉甲子	
29	女院号記	一箱	勅封 158	42 宣下并門号定	48 門号定
30	政始記	一箱	勅封 45	25 政始	41 政始
31	御遊	一箱	勅封 155	35 御遊	43 御遊
32	宣下	一箱	勅封 22	34 宣下	
33	大饗	一箱	勅封 47	26 大饗	

番号	函内訳	員数	対応勅封番号	『禁裡御蔵書目録』『日次記以下御目録』	『御文庫記録目録』『書籍御目録』
34	御八講記	一箱	巻封33・48	44～45八講一・二	49八講
35	儀法講記	一箱	巻封161	46御儀法講	
36	野府記	一箱	巻封1	1日次記一	19日次記一
37	左経記	一箱	巻封3-3	3日次記三左経記	21日次記三左経記
38	中右記	一箱	巻封2	2日次記二	20日次記二
39	山槐記	一箱	巻封9-4	15日次記八山槐記	26日次記八山槐記
40	愚昧記	一箱	巻封9-5-7	14日次記八愚昧記	26日次記八愚昧記
41	勸修寺家記(註2)	一箱	巻封4	7-9日次記四	22日次記四
42	平戸記 十九冊	一箱	巻封9-9	16日次記八平戸記	26日次記八平戸記
43	園太記 卅三冊	一箱	巻封12-3	20日次記十一	30日次記十一
44	薩戒記	一箱	巻封13-3・4	21日次記十三	31日次記十三薩戒記
45	甘露寺家記	一箱	巻封15	24-25日次記十五	33日次記十五
46	日次雑々記	四箱	巻封3-4、13-5、16、17の一部、18カ	5日次記三長秋記、22日次記十三康富記、26日次記十六宣胤卿記、27日次記十六二水記、28日次記十七、29-30日次記十八の一部カ	21日次記三長秋記、31日次記十三康富記、34日次記十六、35日次記十七の一部カ
47	御ゆとの、上ノ日記	二箱	巻封19・20	31-32御湯殿上日記甲・乙	17御湯殿記乙
48	系図	一箱(高松宮本)	52系図		—
49	諸家伝	一箱(高松宮本)	55諸家伝		—
50	官職便覧 五十五冊	一箱	51官職便覧		57官職便覧
51	旧記	一箱	巻封23	58旧記	
52	雑々	一箱	(対応関係不明)	(対応関係不明)	
53	雑々神祇	一箱	巻封29-31の一部	1-3神祇一-三	1神祇
54	雑々神社	二箱	巻封43・95・123の一部カ	5-7諸社一-三カ	2-5諸社一-四カ
55	雑々釈教	一箱	巻封46	43釈教	
56	雑々諸寺	一箱	巻封35・49・50	47-50諸寺一-四	50-54諸寺一-五
57	雑々無目録	五箱	巻封119・120・163カ	59-61雑々上-下カ	13雑々中、37雑々下

(註)

- 1 一部推定を含む。
- 2 『葉室頼業日記』本文に「永昌記九冊、吉記一九、吉統記十七冊」と見える。
- 3 『禁裡御蔵書目録』(Ⅳ)『日次記以下御目録』(Ⅴ)の箱番号は田島a c論文による。Ⅴはゴチック体で表記。
- 4 『御文庫記録目録』(Ⅱ)『書籍御目録』(Ⅲ)の箱番号は田島c論文による。Ⅲはゴチック体で表記。



表一 勅封20―13―2御本御目録記載書目と現存史料との対照表

枝番	No	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
1			○	神皇正統記	一冊	○	東山	勅封52-16	勅封20-30は外題壺元筆
2			○	続神皇正統記	一々	△	東山	勅封52-17	勅封20-1入記目録に記載「明暦」印 外題後西筆
3			○	皇年代私記	一々	△	東山	勅封41-2	「皇年代私記」
4			○	紹運録	一折	○	東山	勅封41-13	勅封20-1入記目録校訂書継部分に記載「明暦」印 包紙後西筆「皇胤紹運録」
5			○	本朝皇胤紹運録	一冊	○	東山	勅封41-16	勅封20-1入記目録校訂書継部分に記載「明暦」印 外題後西筆
6			○	帝王系図	一々	○	書陵部	458-11	「明暦」印 後西筆
7			○	帝王御次第	一々	○	東山	勅封120-54	外題後西筆
8				皇代記	一折	○	東山	勅封41-12	勅封20-1入記目録校訂書継部分に記載
9			○	皇年代記 後柏原院震筆	一々	○	東山	勅封41-10	勅封20-1入記目録校訂書継部分に記載 後柏原筆 外題「皇年代記」
10			○	天地人集	一折	○	東山	勅封52-18	
11			○	天子御諱女院号	二冊	△	東山	勅封175-5-13	「明暦」印 一冊 残り一冊に対応する現存本は不明
12			○	略年代記 奥欠 後小松院震筆	一卷	△	東山	勅封41-33	勅封20-1入記目録校訂書継部分に記載 尾欠 古写 本か否か不明
13			○	醍醐天皇御諱一 雅久	一枚	○	東山	勅封119-1-3	小槻雅久勘文
14			○	桓武天皇 平城天皇 嵯峨天皇 淳和 天皇 私、日本後記抜書筆	二冊	○	東山	勅封41-26	「日本紀略」 勅封41-1入記目録校訂書継部分に記載 「明暦」印
15				扶桑略記「別箱入了、」	十一冊	○	歴博	H-600-1668	「日本紀略」「明暦」印
16				三代格 五十二、「別箱入了、」	二巻	○	書陵部	553-22	現在四巻に分巻 旧別置御物 勅封24-1-2御本新加 目録(校訂筆)に新加として記載
17				新儀式 四、五、	二冊	△	東山	勅封24-7	外題後西筆 勅封24-1-1入記目録に記載 旧別置御物 勅封27-1-2御新加目録(壺元筆)に新 加として記載
18				西宮抄「別箱入了、」	一卷	○	書陵部	553-24	「江家次第」 外題後西筆「行類鈔」 勅封27-1-2御 新加目録(壺元筆)に新加として記載
19				行類抄「別箱入了、」	二巻	○	東山	勅封177-42	外題後西筆 勅封27-1-2御新加目録(壺元筆)に新 加として記載 明治二二年東山御文庫より東京に運ば れる
20				行類抄	六冊	―	書陵部	503-163	10-追20の項参照

枝番	No.	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
1 1	21	△ △	○	無外題「別箱入了、」 風土記	一卷	○	書陵部	553-23	『新任弁官抄』旧別置御物 勅封27-1-2御新加目録(靈元筆)に「端云正殿以下」と見えることにより比定 付札によれば現外題は後桜町筆 『都遷次第并国名風土記』外題後西筆「風土記」「明暦」印
1 1	22	△ △	○	出雲風土記	一冊	○	東山	勅封52-23	外題後西筆
1 1	23	△ △	○	都遷次第	一冊	○	東山	勅封52-24	『都遷次第并国名風土記』外題後西筆「都遷次第」 「明暦」印
1 1	24	△ △	○	遷都次第	一冊	?	東山	勅封41-27乃至 勅封41-28	共に勅封41-1入記目録桜町書継部分に記載 外題後西筆 勅封41-27には「明暦」印
1 1	25	△ △	○	天子御諱	一冊	○	東山	勅封120-33	靈元追記カ『天皇御諱並女院号』書出「天子御諱」 後西筆「明暦」印
1 1	1			後小松天皇御記 御即位日神秘事	一冊	○	東山	勅封67-5-10-1	外題後西筆 勅封142-2-1御入記目録に新加として記載
1 1	2			大礼秘事 後普光院作	一卷	○	東山	勅封142-48	外題・扉題後西筆
1 1	3			後福照院関白消息 御即位神秘之事	一冊	○	東山	勅封66-5-3	『御即位日神秘御伝受御下問状写』端裏書「仰詞案 寛正六十廿六」
1 1	4			仰詞案 寛正六十廿六	一枚	○	東山	勅封66-4-5	『即位灌頂先例奉答書』端裏「関白」
1 1	5			同関白 勅答之写	一枚	○	東山	勅封66-4-12-4	
1 1	6			即位灌頂当奉授例	一枚	○	東山	勅封66-7-5-2	
1 1	7			御即位部類記 治暦四	一冊	○	東山	勅封141-4	行間補書 外題後西筆「明暦」印
1 1	8			御即位部類記 永觀長和 野府記	一冊	○	東山	勅封141-2	外題後西筆
1 1	9			御即位記 嘉承 中右記	一冊	○	東山	勅封141-6	外題後西筆
1 1	10			山槐記 治承 御即位	一冊	○	東山	勅封141-11	外題後西筆
1 1	11			御即位記 治承 吉記	一冊	○	東山	勅封141-13	外題後西筆
1 1	12			御即位記 建久九 三長記	一卷	○	東山	勅封142-43	首尾欠
1 1	13			即位記 端裏欠 建久九	一冊	○	東山	勅封141-102	
1 1	14			御即位部類記 寛元経俊卿記、顯朝卿記、経光卿記、師兼記、	一冊	○	東山	勅封141-26	外題後西筆「明暦」印
1 1	15			同 永仁公衡公記、貞和松重記、	一冊	○	東山	勅封141-41	外題後西筆
1 1	16			二水記 永正十八御即位	一冊	○	東山	勅封141-56	外題後西筆
1 1	17			御即位記 寛文三年	一卷	△	東山	勅封142-33	
1 1	18			正元々年十二月七日記 後小松院震筆	一枚	○	東山	勅封101-1-10	『女車乗御勘例』端裏「正元々年十二月七日記 後小松院宸筆」江戸写 包紙後西筆

枝番	No	合点	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
	19	・	御即位記 年紀不知 後花園院宸筆	一枚	○	東山	勅封 142-45	端裏後西筆「御即位記 年紀不知 後花園院宸筆也」 勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	20	・	御即位行幸御見物部類記	一卷	○	東山	勅封 142-35	外題後西筆 勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	21	・	御即位儀	一卷	○	東山	勅封 142-46	勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	22	・	大札次第 貞和、永享、寛正、永正、 御即位擬侍従定次第	一冊	○	東山	勅封 141-83	外題後西筆「明暦」印
	23	・	御即位擬侍従定次第	一枚	○	東山	勅封 142-51-7	端裏後西筆
	24	・	即位次第 明暦二正廿三 寛文三 左府作進	一帖	△	東山	勅封 141-89	外題後西筆、「明暦」印
	25	・	即位式	一卷	○	東山	勅封 142-29	
	26	・	即位次第 同	一と	○	東山	勅封 141-112	外題後西筆
	27	・	次第	一帖	△	東山	勅封 120-1-2	『御即位次第』 後西筆 書出「次第」
	28	・	御即位	一帖	△	東山	勅封 142-19	『御歴代御即位月日御年齢場所一覽』 書出「御即位」 後西筆 勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	29	・	即位雜例条々兼日 上下	二冊	○	東山	勅封 141-74	外題後西筆 勅封 141-1 御入記目録に記載
	30	・	同当日 上下	二と	○	東山	勅封 141-75	外題後西筆等 勅封 141-1 御入記目録に記載
1 1 2	31	・	即位条々 兼日、當日、 御即位支干并日事	二と	○	東山	勅封 141-76・77	外題後西筆「明暦」印 勅封 141-2 御入記新加目録 に新加として記載
	32	・	御即位支干并日事	一枚	○	東山	勅封 142-51-1	
	33	・	御即位年例并月例日例等	一帖	○	東山	勅封 142-20-1	『歴代御即位御年齢並月日干支一覽』 後西筆
	34	・	廢務日即位例	一枚	○	東山	勅封 141-107	勅封 141-2 御入記新加目録に新加として記載
	35	・	御即位参役人重輕服例	一枚	△	東山	勅封 141-108	『中原師象勘例注進』 勅封 141-2 御入記新加目録に新 加として記載 他に勅封 142-51-10 も可能性あり
	36	・	御即位職掌類聚抄	一卷	○	東山	勅封 142-55	外題後西筆 勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	37	・	即位職掌部類抄	一冊	?	東山	勅封 141-61乃至 勅封 141-62	共に外題後西筆（-61 は「明暦」印） 勅封 141-2 御 入記新加目録に新加として記載
	38	・	代々御即位褒帳人 御即位役者事	一冊	○	東山	勅封 141-63	『御即位役者部類』 代々御即位褒帳人と御即位役人事 よりなる 外題後西筆「明暦」印 勅封 141-2 御入 記新加目録に新加として記載
	39	・	代々御即位役者部類	一と	○	東山	勅封 141-64	外題後西筆「明暦」印 勅封 141-1-1 御入記目録に 記載
	40	・	御即位職掌人 貞和五	一と	○	東山	勅封 141-67	外題後西筆「明暦」印 勅封 141-1-1 御入記目録に 記載
	41	・	御即位散状	一と	○	東山	勅封 142-15	「明暦」印 勅封 142-2-1 御入記目録に記載
	42	・	次將散状	一枚	○	東山	勅封 120-1-3	

枝番	No	合点	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
1 ├ 2	43	・	永徳御即位職掌人	一卷	○	東山	勅封 141-110	『御即位散状』端裏「永徳御即位職掌人」外題後西筆
	44	・	近代御即位役者部類	一卷	○	東山	勅封 142-54	後西筆 端裏「即位役者 天文五」
	45	・	即位役者 天文五	一枚	○	東山	勅封 142-52-1	
	46	・	御即位 慶長十六 仙洞御即位	二枚	○	東山	勅封 142-52-2・3	
	47	・	○新院御即位 寛永七年九月十二日	一枚	○	東山	勅封 142-52-4	
	48	・	後光明院御即位 寛永廿年十月廿一日	二枚	○	東山	勅封 142-52-6	書出「後光明院御即位／地下之役者」2紙
	49	・	寛永廿	一枚	○	東山	勅封 142-51-5	端裏「寛永廿」
	50	・	内弁右大臣康道公――	一枚	○	東山	勅封 120-1-4	書出「内弁右大臣康道公」
	51	・	後光明院御即位褰帳	一枚	○	東山	勅封 142-52-5	書出「後光明院御即位／褰帳」
	52	・	御即位内弁―― 明暦	一閉	○	東山	勅封 142-52-7	書出「御即位／内弁」
1 ├ 3	53	・	御御装束絵様 新古	一卷	○	東山	勅封 142-47	外題後西筆 勅封 142-2-1 御入記目録に新加として記載
	54	・	高御座絵図 新古	二巻	○	東山	勅封 142-51-8・9	『御即位記並絵図』の内 外題後西筆「明暦」印 石田実洋氏の御教示による 勅封 142-51-8は「明暦」印
	55	・	勅答	一包	○	東山	勅封 120-1-1	
	56	・	目録案	一枚	△	東山	勅封 142-51-2	
	57	・	応安七年 宿紙横折 親長卿筆	一枚	―			
	58	・	即位指図 明暦	一个	―			
	1抹	×	天皇元服部類記	一卷	○	陽明	41484	
	2抹	×	天皇元服記 嘉応三 坊槐記	一巻	○	陽明	41486	
	3抹	×	天皇元服記 文治 玉葉記	一冊	―			
	4抹	×	天皇元服後宴部類記	一巻	○	陽明	41482	外題後西筆「明暦」印
5抹	×	天皇元服式 仁治	一卷	○	陽明	41488	『天子冠儀式』内題「御元服式」	
6抹	×	御元服後宴記 建長	一巻	○	陽明	41490		
7抹	×	天皇御元服記 建治	一巻	○	陽明	41491		
8抹	×	主上御元服定部類 延慶	一巻	○	陽明	41494		
9抹	×	天皇御元服部類記 同	一巻	○	陽明	41493	外題後西筆	
10抹	×	天皇元服式 永享	一巻	○	陽明	41496	『明暦』印	



					枝番			
No	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
11 抹	×		主上御元服上寿作法抄	一々	○	陽明	41503	
12 抹	×		天子冠礼部類記惣録	一冊	?	東山	勅封 143-22	扉題後西筆
13 抹	×		天皇御元服 加冠、理髪、	一冊	―			
14 抹	×		空頂黒幘	一个	―			かつて近衛家に伝来（宗建卿記享保一八年二月一日条）
15	・	○	代々御元服	一帖	○	東山	勅封 143-44	後西筆 勅封 143-1-4 桜町筆目録に新加として記載 されるものに相当するか
16	・	○	親王御元服部類記	一冊	○	東山	勅封 143-33	外題後西筆「明暦」印
17			御元服記 応安	一巻	―			
18	・	○	後円融院――	一々	○	東山	勅封 143-114	『壬生忠利親王御元服勘例』 勅封 143-1-2 親王御元 服記録御入記目録に記載
19	・	○	永正九年――	一々	○	東山	勅封 143-115	『押小路師定親王御元服勘例』
20	・	○	親王御元服記 永正九守光卿記	一々	○	東山	勅封 143-111	外題後西筆「明暦」印
21	・	○	御元服事 永正九―	一冊	○	東山	勅封 182-9-14	『和長卿記』
22	・	○	御元服次第 寛正親王御元服被用次第	一帖	○	東山	勅封 143-55	外題後西筆「明暦」印 勅封 143-1-4 桜町筆目録に 新加として記載
23	・	○	同 慶長	一帖	○	東山	勅封 143-53	外題後西筆
24	・	○	親王御元服次第 寛永廿	一帖	○	東山	勅封 143-67	外題後西筆「明暦」印
25	・	○	親王御元服仮名記 同	一帖	○	東山	勅封 143-68	外題後西筆「明暦」印
26	・	○	同	一帖	○	東山	勅封 143-69	勅封 143-68 と同文
27	・	○	親王御元服次第 寛文二	一帖	○	東山	勅封 143-63	外題後西筆 勅封 143-1-4 桜町筆目録に新加として 記載
28	・	○	親王御元服加冠理髪例	一冊	○	東山	勅封 143-64	外題後西筆
29	・	○	同理髪事	一卷	○	東山	勅封 143-110	『親王御元服羽林及弁官理髪例』 端裏「親王御元服理 髪事」
30	・	○	光豊卿記	一枚	○	東山	勅封 120-4-8	
31			親長卿筆 禪閣へ被尋来々 横折	二枚	○	東山	勅封 120-6-8・9	
32		○	御元服風記	二枚	―			
33		○	寛文二御元服 役者、指図、	一結	―			
34		○	源久良王――	一枚	○	東山	勅封 22-47-9	後西筆
35		○	貞清親王――	一枚	○	東山	勅封 120-4-13	
36		○	邦道親王――	一枚	○	東山	勅封 143-119-1	後西筆

枝番	1 1 3																								
No	37	38	追39	追40	追41	追42	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
合点	・	・					・	／	・	・	・	・	・		・	・	・	・	・	・	・	・			
爪		○					○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	
書目名	普賢院関白元服記	元服部類記 吉統記、薩戒記、	周賢	親王家称号	穩仁親王元服	元服作法 端欠 古筆	後深草院御記 弘長	光明院御記 康永、暦応、 「御所へまいらせし」	同新写	旧院御記 通村公筆	元弘二年	後円融院御記 永徳	後柏原院御記	同震筆御記 十一月朔日	後奈良院御記抜書	天正三年 正親町院震筆	無外題 一めてた事ー 正親町院震筆	同 一神々のー 同震筆	後奈良院・正親町院 御記之類	正親町院より後陽成院へまいらせらる、御覚書共	御ゆとの、うへの日記ぬきかき	寛永二年 御ゆとの、うへの日記	正親町院御判	後陽成院御判	女房奉書人によりかくへき様 後柏原院震筆
員数	一冊	一冊	一枚	一枚	一枚	一卷	一枚	二巻	一包	一卷	一冊	一冊	三冊	一卷	一冊	一冊	一と	一と	一結	一結	一結	一冊	一包	一包	一枚
対応	?	○	○	○	○	○	○	○	△	一	○	?	○	一	△	○	△	△	○	○	○	?	一	一	一
所蔵	東山	東山	東山	東山	東山	東山	東山	東山	東山		東山	東山	東山		円照寺	東山	東山	東山	東山	東山	東山	東山			
番号	勅封163-10	勅封143-42	勅封22-44-1	勅封120-4-15	勅封143-119-3	勅封163-60-7	勅封130-56	勅封115-7	勅封67-5-8-4		勅封141-45	勅封67-5-9-2	勅封67-5-11-1-3			勅封101-1-7-1	勅封101-1-7-4-2	勅封101-1-7-4-7	勅封101-1-5	勅封101-1-7-2-5	勅封67-6-11	勅封62-11-2-8-4			
備考	『後香園院関白元服記』の誤り？	外題後西筆「明暦」印	追記 後西筆	追記	追記	追記	勅封130-6御新加目録（桜町筆）に新加と見える 外題後西筆	箱書靈元筆	外題後西筆「明暦」印 他の冊は靈元筆等		『元弘御即位記』 後西筆「明暦」印		後西筆			『会始読師講師事御抜書』	『七月御めてた事の事』 一通 包紙後西筆	『神々の巻数御いたたきの事等御覚書』 一通 包紙後西筆		畳紙後西筆「正親町院より後陽成院へまいらせらる、御覚書共」 勅封101-1-7-4-2・7は含まれないか 包紙「御ゆとの、うへの日記ぬきかき」 一部後西筆	靈元筆				

3										枝番
No.	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考		
1	・	○	勝一親王 親王宣下一通、叙品一通、 知一親王 御名字折紙一枚、親王宣下一通、叙品一通、	一包	○	東山	勅封 22-47-2	包紙後西筆		
2	・	○	方一親王 宣下一通	一と	○	東山	勅封 22-47-3	包紙後西筆		
3	・	○	誠一親王 宣下一通	一と	○	東山	勅封 22-47-4	包紙後西筆		
4	・	○	政一親王家勅別当宣旨	一通	○	東山	勅封 22-48-5	後西筆 勅封 22-1 入記目録（靈元天皇宸筆）に新加として記載		
5	・	○	御名字勘文 知一、誠一、	二通	―					
6	・	○	親王宣下風記	二と	―					
7		○	親王宣下風記	二と	―					
8	・	○	当今御諱勘文并勅答等	一包	?	東山	勅封 143-112-2	『後西天皇御諱勘文書類』 包紙後西筆		
9	・	○	立親王宣下次第 明暦四正廿八	一帖	○	東山	勅封 22-47-8	外題後西筆		
10		○	同散状之写	一枚	―					
11	・	○	親王宣下次第 慶安元七十九	一帖	○	東山	勅封 22-47-6	外題後西筆		
12	・	○	親王宣下式部卿	一包	○	東山	勅封 22-47-5	包紙後西筆「親王宣下／式部卿」		
13	・	○	三品位記	一卷	―					
14	・	○	雑々 元服諱称号等之事	一包	―					
15	・	○	智仁親王伝	一枚	△	東山	勅封 163-57-3	『八条宮智仁親王親王宣下叙品年記』		
16	・	○	穩仁親王 名字折紙下書	一枚	△	東山	勅封 163-57-6	『後西天皇後水尾天皇御贈答状』		
17	・	○	同 諱勘文之写	一枚	○	東山	勅封 163-57-5	後西筆		
18	・	○	親王宣下 応永十五年三月八日	一通	○	東山	勅封 22-47-1	『沙弥義仁立親王宣下宣旨』		
19		○	名字勘文	四通	?	東山	勅封 22-48-1	勅封 22-48-1 は一通二紙		
20		○	親王宣下散状	二枚	?	東山	(備考参照)	東山 勅封 22-48-2、4、勅封 163-57-7 あり、各一通		
21	・	○	親王宣下付行例	一通	○	東山	勅封 120-4-4	『外記史親王宣下付行勘例』 書出「親王宣下付行之例」		
22	・	○	貞致親王 宣下之事 文	一包	?	東山	勅封 51-6	『式部卿良仁親王一品宣下例書』		
23		○	承応二年正月廿一日	一枚	○	東山	勅封 163-57-4	外題後西筆「明暦」印		
24	・	○	准后与親王座次之事	一冊	○	東山	勅封 70-5-1	包紙後西筆「親王准后之事」		
25	・	○	親王准后之事	一包	○	東山	勅封 119-1-11	後西筆		
26	・	○	親王与大臣座次 慶長年中条々 後中院自筆	一卷	△	東山	勅封 119-2-3			

枝番	No	合点	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
3	27	・	関白勅答 冬良公筆	一枚	△	歴博	H-600-196-40	折紙『記録目録』400-14
	追28		女院外母后等御名字同訓事	一枚	○	東山	勅封120-3-4	
	追29		立親王次第	二枚	△	東山	勅封120-4-2	一通二紙
	追30		継嗣令集解云々	一卷	○	東山	勅封74-4	『親王御事令式等拔書』書出「継嗣令集解云」勅封74-2御不足新加目録に記載
	追31		昭子賀子内親王宣下宣下写	二包	―			
4	1		禁秘抄	一冊	?	歴博	H-600-934	この他にも東山・歴博に『禁秘抄』あり
	2		雲図抄	一卷	○	歴博	H-600-119	『明暦』印『記録目録』404 東山御文庫本は二巻本
	3	／	禁掖秘抄	一冊	○	歴博	H-600-839	『明暦』印
	4		名目鈔	三々	○	東山	勅封67-6-17・18、 勅封119-12	勅封67-6-18は久我内府進上（後西筆付札）勅封119-12には『明暦』印あり
	5		名目抄之内不審	一卷	○	東山	勅封163-60-13	
	6抹	／	類聚雜要抄	四卷	―			流布本本奥書によれば、後西院所蔵本は卷一甘露寺親長筆、卷二三条西実隆筆、卷三町広光筆、卷四中御門宣胤筆であった。国会図書館本はこれとは別
	7		承相名字	一冊	○	歴博	H-600-777	『明暦』印『記録目録』417
	8		吉口伝	一冊	○	東山	勅封163-22	外題後西筆
	9		吉口伝目録	一々	○	東山	勅封52-6	外題後西筆
	10	／	吉口伝故実抄「輪王寺宮借用、」	一々	―			
	11		夕拝備急抄	二冊	○	歴博	H-600-133	『明暦』印『記録目録』411
	12	／	弁官至用集「左府借進、」	一々	―			
	13		貫首秘抄	一々	○	東山	勅封52-7	外題後西筆「明暦」印
	14		愚聞抄 龍山筆	一々	○	東山	勅封120-42	勅封174-2-25禁裡御蔵書目録の雑々上に記載
	15		雜要抄	一々	○	歴博	H-600-937	『明暦』印『記録目録』419
	16		同 青松	一々	―			
	17		同 雜事	一々	○	東山	勅封113-5-3-5	
	18	／	同 三光院内府被書遣具房朝臣「輪王寺宮借用、」	一々	―			
	19		舞踏作法 後陽成院宸筆	一枚	○	東山	勅封120-7-10	後陽成筆 包紙後西筆



枝番																									
No.	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考																	
20		○	飾抄	一冊	?	東山 歴博	勅封 120-75乃至 H-600-789	共に「明暦」印																	
21		○	当家着用装束以下事	一冊	△	国会	わ 210.09-52	歴博 H-600-103 は外題『桃花薬業 附胡曹抄』(後西筆)なので異なるか 勅封 174-2-25 禁裡御蔵書目録の雑々上に記載																	
22		○	物具装束抄	一冊	○	歴博	H-600-1510	奥書後西筆「明暦」印 『記録目録』 418																	
23		○	衣服事	一と	○	歴博	H-600-1494	『三条家装束抄』内題「衣服事」																	
24		○	女房の官のしな	一冊	?	東山	勅封 67-5-16-2	外題後西筆「明暦」印 他に勅封 67-5-16-1にも「明暦」印あり																	
25		○	わか宮御わらハしやうそくの事 冬良公筆	一枚	○	東山	勅封 157-81	『若宮童装束注文』																	
26		○	衣のゑ	一折	―																				
27		○	萌木匂打交―	一枚	○	東山	勅封 120-6-14	『馬具書付』書出「萌木匂打交」																	
28		○	冬御扇 永家卿筆	一枚	○	東山	勅封 120-6-12	『御扇覚書』書出「冬／御檜扇」																	
29		○	かも社指貫之事	二枚	―			「御装束之事」「装束之事」を墨抹																	
30		○	素然文	一通	○	東山	勅封 163-60-12																		
31		○	装束方之事 高倉 山科	一結	―																				
32抹	／		車図「別箱入了、」	三巻	?	東山	勅封 120-25	二巻、共に外題靈元筆 勅封 174-2-25 禁裡御蔵書目録の雑々上にも二巻と見える																	
33		○	日野大納言殿 光平	一包	○	東山	勅封 130-90	「二条光平勅問申詞」包紙「日野大納言殿へ 光平」																	
34		○	清涼殿御厨子図	一卷	○	東山	勅封 167-25	勅封 130-5 御追加目録(桜町筆)に新加と記載																	
追35			女房名	一卷	○	東山	勅封 120-14-5	「明暦」印																	
追36			指貫切	一包	△	歴博	H-600-201-20	後西筆																	
1	・		礼服御覧次第 明暦	一帖	○	東山	勅封 141-88	『大紋キレ』『記録目録』 425																	
2	・		同 寛文三	一卷	○	東山	勅封 142-30	外題後西筆「明暦」印																	
3	・		同指図 寛永廿	一个	○	東山	勅封 120-1-5	勅封 142-1 御入記目録に新加一包とあるものに相当か																	
4	・		入目録草 白紙	二通	―																				
5	・		同 清書 宿紙	一通	―																				
6	・		御即位御祈 明暦 十个寺等之例 一包	一枚	△	東山	勅封 142-52-8・9	勅封 142-52-10 の可能性もあり																	
追7			貞享御即位灌頂之事	一結	―			靈元天皇の追記																	

6																					枝番
No.	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考													
1	・		御伝国部類記	一冊	○	歴博	H-600-162	外題後西筆カ「御伝国部類記」「明暦」印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
2	・		御讓位部類記	一冊	△	歴博	H-600-158	外題後西筆カ													
3	・		御讓位部類記	一と	△	歴博	H-600-159	外題後西筆 H-600-245-3部類記等記録目録に記載 勅封120-13-4御記類目録(中御門筆)に「此分後西院御時分ヨリ有之由」と記載													
4	・		同 長和、治承、文保、貞和、	一と	○	歴博	H-600-157	外題後西筆カ													
5	・		脱屣部類記 永万	一卷	○	歴博	H-600-143-1	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
6	・		同 承元	一と	○	歴博	H-600-143-2	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
7	・		同 正元	一と	○	歴博	H-600-143-3	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
8	・		同 永仁六	一と	○	歴博	H-600-143-4	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
9	・	○	同 正安	一と	○	歴博	H-600-143-5	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
10	・		同 貞和四	一と	○	歴博	H-600-143-6	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
11	・		讓位即位記 永徳	一冊	○	歴博	H-600-156	「明暦」印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
12	・		踐祚同日御元服部類記	一と	○	歴博	H-600-164	外題後西筆カ													
13	・		踐祚部類記 明応、大永、	一と	○	歴博	H-600-166	外題後西筆カ													
14	・		踐祚部類抄	一卷	○	歴博	H-600-147	H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
15	・		受禪踐祚年之例	一冊	?	歴博	H-600-1565	霊元筆 内題「受禪踐祚年之例」													
16	・		踐祚御即位等奉行人部類	一と	○	歴博	H-600-165	「明暦」印 外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載													
17	・		御讓位 内弁	一帖	○	歴博	H-600-993	後西筆 外題「御讓位 内弁」													
18	・		院中記	一冊	△	東山	勅封157-3	外題後西筆 外題「延久四年十二月 脱履／同五年正月院中記」H-600-245-3部類記等記録目録に記載か													
19	・		院中事抄出記 御幸始部類記	一と	○	東山	勅封52-4	外題後西筆「院中事抄出記／御幸始部類記」「明暦」印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載 勅封120-13-4御記類目録(中御門筆)に記載													
20	・		布衣始部類記	一と	○	歴博	H-600-168	外題・奥書後西筆													
21	・		御幸始布衣始等部類記	一と	○	東山	勅封52-3	外題後西筆 勅封120-13-4御記類目録(中御門筆)に「此分後西院御時分ヨリ有之由」と記載													

6						枝番		
No	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
22	・		御幸始布衣始記 文永十一	一卷	○	歴博	H-600-146	外題後西筆カ H-600-245-3部類記等記録目録に記載
23	・		讓位以後被補院司事	一枚	○	歴博	H-600-203-12	『院殿上始次第』書出朱書「讓位以後被補院司事」H-600-245-3部類記等記録目録に記載
24	・	○	建久院司事	一枚	?	歴博	H-600-203-13	『院司交名写』霊元筆 書出「建久院司事」
25	・		御幸始行列 寛文三	二卷	?	歴博	H-600-82-10-11	
26	・		受禪踐祚	一折	○	歴博	H-600-992	後西筆 内題「受禪踐祚」
27	・		御讓位	一と	○	歴博	H-600-203-15	後西筆 内題「御讓位」
28	・		踐祚仮名次第 明応九	一折	○	歴博	H-600-1512	『明暦』印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載
29	・		同 承応三	一と	○	歴博	H-600-1587	『明暦』印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載
30	・		陪膳次第 同	一と	○	歴博	H-600-1586	『明暦』印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載
31	・		吉書御覧次第 同	一と	○	歴博	H-600-1513	後西筆「明暦」印 H-600-245-3部類記等記録目録に記載
32	・		御讓位次第 寛文 警固々関之儀	一と	○	歴博	H-600-203-16-1	
33	・		同 寛文三	一と	○	歴博	H-600-203-16-3	
34	・		勅符官符之写 同	一包 <sup>七枚</sup>	○	歴博	H-600-204-2	『警固固関勅符官符写』包紙「勅符官符之写 七枚」 現状六通
35	・		御讓位次第 寛文三 劍璽渡御之儀	一折	○	歴博	H-600-203-16-2	
36	・		尊号宣下次第	一卷	○	歴博	H-600-82-15	
37	・		同 宣命 寛文	一枚	△	歴博	H-600-245-6	
38	・		散状 寛文三	二枚	?	歴博	H-600-199-8-16・17	『記録目録』436カ H-600-201-15の可能性もあり (よれば『記録目録』527-1・2)
39	・		同参陣	二枚	△	歴博	H-600-203-9	後西筆 書出「警固々関参陣」「御讓位参陣」
40	・	○	踐祚散状 白紙	一枚	△	歴博	H-600-203-14	
41	・		後陽成院 三月一	一枚	○	歴博	H-600-203-5	後西筆 書出「後陽成院〈三月廿五日……〉」
42	・		後陽成院 慶長十六年三月一	一閉	○	歴博	H-600-203-4	後西筆 書出「後陽成院／慶長十六年……」
43	・		劍璽渡御散状之写 寛永廿	一閉	○	歴博	H-600-203-7の内	二紙一綴 書出「劍璽渡御」H-600-245-3部類記等記録目録に記載
44	・		御讓位散状之写 寛永廿	一	○	歴博	H-600-203-7の内	一紙 書出「御讓位」H-600-245-3部類記等記録目録に記載
45	・		同指図 寛永廿	二枚	○	歴博	H-600-203-8	H-600-245-3部類記等記録目録に記載
46	・		御讓位 後陽成院	一枚	○	歴博	H-600-203-6	後西筆 端裏「御讓位 後陽成院」

枝番	No	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
6									
	47	・		御譲位前日――	二枚	○	歴博	H-600-203-10	後西筆 書出「一御譲位前日」
	48	・		剣璽渡御行列 寛文、承応、	二卷	○	歴博	H-600-82-5・9	H-600-245-3部類記等記録目録に記載
	49	・		内侍所渡御行列 明暦二卷、万治、	三卷	?	歴博	H-600-82-6・8・13	御本御目録の記載、明暦二卷万治一卷計三卷の意か
	追50			寛文三年正月廿七日布衣始	一枚	○	歴博	H-600-203-17	後西筆 書出「寛文三年正月廿七日布衣始」
	追51			布衣始之例	一枚	○	歴博	H-600-203-11	霊元筆 書出「布衣初之例」
	追52			拝御部類記目六	一卷	○	東山	勅封66-4-6-1	後西筆「明暦」印
	1	・	／	行幸部類記 大記、永昌記、	一冊	○	歴博	H-600-173	外題・奥書後西筆「明暦」印
	2	・	／	行幸部類記 年紀不同	一と	○	歴博	H-600-174	外題・奥書後西筆「明暦」印
	3	・	／	遷幸部類記	一と	○	歴博	H-600-181	外題後西筆
	4	・	／	雅氏朝臣記 永徳元 行幸	一と	○	歴博	H-600-112	外題後西筆カ
	5	○	○	北山殿行幸記 応永十五 仮名	一と	△	国会	わ2104-54	外題後西筆「北山殿行幸記 応永十五年、仮名」東山御文庫本勅封130-92あるも外題「北山行幸記 仮名」
	6	○	○	行幸記 永享九十廿一花御所	一と	△	東山	勅封120-17	外題後西筆
	7	・	／	御方違行幸記 永享十一 建聖院内府記	一卷	○	歴博	H-600-145	外題後西筆カ
	8	・	○	聚楽行幸仮名記	一卷	―			
	9	・	／	遷幸伝奏事 文明十一親長	二冊	○	歴博	H-600-154	
	10	・	／	同 無表紙	二と	○	歴博	H-600-97	『親長卿記』共紙表紙、外題無し
	11	・	／	羽林要抄 雨皮事	一と	○	歴博	H-600-139	『明暦』印
	12	・	／	行幸次第 寛永元三廿五	一折	○	歴博	H-600-1508	外題後西筆
	13	・	／	同 慶安四二廿五	一卷	○	歴博	H-600-81	
	14	・	／	遷幸次第 明暦元	一折	○	歴博	H-600-203-18	
	15	・	／	行幸出御儀	一折	○	歴博	H-600-1511	外題「行幸出御儀」
	16	／	／	散状 白紙二、宿紙二時房公筆、	四枚	○	歴博	H-600-2-5-2-1 ～4	
	17	・	／	行列 一卷不足	八卷	?	歴博	H-600-82-1～4・ 7・14、H-600-202-11	寛永七年一二月一〇日 巻紙 『記録目録』439・527-6カ
	18	・	／	二条大閣状 大殿祭事	一枚	○	歴博	H-600-201-9	
	19	／	／	天正十八年――	一通	○	歴博	H-600-203-3	『晴豊卿記光豊卿記拔書』
7									



枝番																									
No	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考																	
20	○		日時勘文之写	四枚	―																				
21	・ ／		寛永行幸記 二条亭	二冊	△	歴博	H-600-177 H-600-805-7																		
22	・ ／		八幡御幸御記 水早宸記	一卷	○	東山	勅封 67-6-3	外題後西筆																	
23	・ ／		八幡御幸記	一卷	○	東山	勅封 67-6-4	外題後西筆																	
24	・ ／		神社御幸部類記 中右記	一冊	○	歴博	H-600-179-1	外題後西筆																	
25	・ ／		同 継塵記	一巻	○	歴博	H-600-179-2	外題後西筆																	
26	・ ／		神社御幸部類記	一巻	○	歴博	H-600-178	外題後西筆																	
27	・ ／		諸院御幸部類記 山槐	一卷	○	歴博	H-600-144																		
28	・ ／		所々御幸部類記 継塵	一冊	○	歴博	H-600-176	外題後西筆カ																	
29	・ ／		御幸記 建保六 頼資記	一卷	?	東山	勅封 130-55	『御幸部類記』書出「権中納言頼資」他に『有栖川宮御書類目録』に「御幸記 建保六／頼資卿記」一軸見える（『西面御文庫宸翰古筆並和漢書籍総目録』788カ）																	
30	・ ／		無外題 端云日次事	一巻	○	歴博	H-600-245-1	『大臣大饗次第注文』																	
31	・ ／		御移徙御幸行列 不被用之、 「本院御所 寛文二」	一巻	―																				
1			四方拝次第 後柏原院震筆	一卷	―																				
2			四方拝呪 正親町院震筆	一枚	△	東山	勅封 66-8-42-1																		
3	・ ／		御笏紙 四方拝次第 内一枚進之、	二枚	○	歴博	H-600-199-1	『記録目録』410																	
4	○ ／		笏紙之写 四方拝次第	一枚	―																				
5	・ ／		四方拝者不可為神事― 覚恵筆	一枚	○	歴博	H-600-201-10	『一条兼良書状』本文書出「四方拝者不可為神事候」 『記録目録』461																	
6	○		同御剣将	一卷	?	歴博	H-600-205-2-9	『四方拝散状』書出「四方拝／御剣」																	
7	・ ／		御ゆとの、うへの日記抜書 四方拝の事	一冊	○	東山	勅封 118-2-12																		
8	・ ／		四方拝諸役	一冊	?	歴博	H-600-1594	『四方拝之例』後西筆 『記録目録』431-2																	
9	○		同下行之事	一卷	―																				
10	○		小朝拝之事 後陽成院震筆	一枚	―																				
11	・ ／		節会部類記 端欠 白馬、踏歌、	一冊	○	歴博	H-600-169	外題後西筆カ 『記録目録』422																	
12	・ ／		愚昧記 節会部類	一冊	○	歴博	H-600-170	『明暦』印 外題後西筆カ 『記録目録』414																	
13	・ ／		節会勘例 宣胤卿筆	一巻	○	歴博	H-600-58	中御門宣胤筆カ 『明暦』印 外題後西筆 『記録目録』415																	

8

8																											枝番
No	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考																			
14	・ ／		玉葉抄 節会勘例	一と	○	歴博	H-600-72	〔明暦〕印																			
15	・ ／		三節会略次第 直房朝臣筆	一と	△	歴博	H-600-38	〔明暦〕印 〔記録目録〕425																			
16	・ ／		元日節会次第	一折	△	歴博	H-600-46	〔明暦〕〔官庫〕印 外題後西筆カ																			
17	・ ／		元日節会次第	一冊	△	歴博	H-600-1536	〔明暦〕印 〔記録目録〕429																			
18	・ ／		元日節会略次第 親長卿筆	一卷	○	歴博	H-600-78	甘露寺親長筆 〔明暦〕印 外題後西筆カ 〔記録目録〕438-2																			
19			白馬節会次第 端欠 親長卿筆	一と	―																						
20	・ ／		踏歌節会次第 政家公筆	一折	―																						
21	・ ／		同	一折	?	歴博	H-600-40 乃 <sub>五</sub> 至 H-600-44	H-600-40は後西筆、〔明暦〕印（〔記録目録〕441）、 H-600-44は外題後西筆、〔官庫〕〔明暦〕印																			
22			節会御膳次第 職事要 兼秀公筆	一卷	―																						
23			節会御膳次第	一折	―																						
24	／		登子利之譜 持通公筆	一枚	―																						
25	・ ／		指図 西礼	一枚	―																						
26			舞妓事 宗賢朝臣勘例 後花園院震筆	一枚	―																						
27			文和五年正月大 親長卿筆	一枚	―																						
28	／		長寛二年正月 宣胤卿筆	一枚	○	歴博	H-600-199-4	〔中納言節会外弁勤仕例〕 中御門宣胤筆 〔記録目録〕445																			
29			下名	一通	―																						
30	／		踏歌節会 親長卿筆	一枚	○	歴博	H-600-199-2	甘露寺親長筆 〔記録目録〕446																			
31	・ ／		節会散状之写	一冊	○	歴博	H-600-994	後西筆 〔記録目録〕412																			
32	・ ／		同 後光明院御代	一冊	○	歴博	H-600-1604	外題「後光明院御代／節会散状写」 〔記録目録〕432																			
33	・ ／		同散状之写 諸役等	四冊	―																						
34	・ ／		同	二包	―																						
35	・ ／		節会散状 明暦、万治、古キ	一 <sub>七</sub> 包	△	歴博	H-600-199-8-1 ～15	H-600-189-8-1～15は一通不足 〔記録目録〕436																			
36			白馬奏 古キ	四通	―																						
37			白馬奏 明暦、万治、古キ	一 <sub>二</sub> 包	―																						
38			坊家奏 古キ	二通	―																						
39			坊家奏 明暦、万治、古キ	一 <sub>十</sub> 包	―																						

枝番	No	合点	爪	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
	40			せちゑもしくさり	二枚	—			
	41			朔旦冬至加表 天文五	一卷	—			
	42			同写 慶安三	一と	—			
	43			文共 横折	四ツ	—			
	追44			節会諸役人	一冊	○	歴博	H-600-55	後西筆 『記録目録』431の内
	追45			元秘抄	五冊	○	歴博	H-600-781	外題霊元筆 『記録目録』420
	追46			元秘別録	一冊	○	歴博	H-600-1012	外題後西筆 『記録目録』423
	追47			改元仗儀	一卷	○	歴博	H-600-150	『記録目録』407
	追48			元年辛丑	一卷	○	歴博	H-600-149	書出「文武 元年辛丑……」 『記録目録』406
	追49			改元月日例	一折	○	歴博	H-600-151-2	書出「改元月日例」 「明暦」印 『記録目録』426カ
	追50			改元日例	一折	○	歴博	H-600-151-1	外題「改元日例」 「明暦」印 『記録目録』426カ
	追51			改元散状之写	八枚	○	歴博	H-600-201-11	霊元筆 『記録目録』456
	1	／		三槐抄	三巻	?	歴博 東山	H-600-77乃至 勅封153-58	歴博本は後西天皇奥書、「明暦」あり、外題後西筆カ（『記録目録』405）
	2	／		県召除目次第 愚作	三冊	○	歴博	H-600-49	『記録目録』434
	3			後陽成院御記 慶長六叙位	一冊	○	歴博	H-600-52	外題後西筆カ 「明暦」印 『記録目録』416
	4	／		叙位記 延徳四年禅光院相国記	一冊	○	歴博	H-600-71	外題後西筆
	5	／		叙位次第 一条禅閣次第	一と	○	歴博	H-600-70	外題後西筆
	6			右少弁時範記 寛治八除目	一と	○	歴博	H-600-61	外題後西筆 『記録目録』413
	7	／		春除目初竟夜参事 文明七	一卷	○	歴博	H-600-80	外題後西筆カ 『記録目録』408
	8	／		叙位入眼奉行略次第 元長卿筆	一と	○	歴博	H-600-79	外題後西筆カ 『記録目録』438-1
	9			臨時叙位略次第 経元卿筆	一と	—			
	10	／		除目奏聞并撰定次第	一帖	○	歴博	H-600-205-10	『記録目録』427
	11	／		叙位略次第 仮名	一帖	?	歴博 東山	H-600-43乃至 勅封44-48	歴博本は後西筆（『記録目録』428）、東山御文庫本は外題後西筆、「明暦」印
	12	／		県召除目次第 二条大閤	一帖	○	歴博	H-600-45	外題後西筆カ 『記録目録』430
	13	／		除目諸給秘抄	一冊	○	歴博	H-600-76	外題後西筆カ

枝番	No	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
	14	／		叙位除目執筆抄	一冊	○	歴博	H-600-57	「明暦」印 外題後西筆カ 『記録目録』421
	15	／		刻限昼御座―着御次第	一枚	○	歴博	H-600-201-12	「叙位略次第」書出「刻限昼御座に着御」『記録目録』463
	16			叙位聞書	八巻	―			
	17	／		女叙位聞書	三巻	○	歴博	H-600-200-3	『記録目録』464
	18	／		除目聞書	三巻	○	歴博	H-600-200-1・9・11	『記録目録』472～474
	19			十年旁	二と	―			東山御文庫勅封44-22は扉題後西筆だが冊子本
	20	／		加階叙位例	二と	○	歴博	H-600-200-7・14	『記録目録』470・471
	21	／		兼国例	二と	○	歴博	H-600-200-6・10	『記録目録』468・469
	22	／		申文 札有	一結 <sup>五</sup>	○	歴博	H-600-200-4・5・8・12・13	『記録目録』467-1～5
	23	／		掌侍加級例 横折	一枚	○	歴博	H-600-201-2	「東坊城和長勘例」書出「掌侍加級次第例」『記録目録』457
	24	／		女叙位散状	一枚	○	歴博	H-600-201-3	『記録目録』458
	25	／		叙位々記 宿紙	一卷	○	歴博	H-600-201-15	「持明院基連位記」『記録目録』475
	26	／		諸国主典已上補任帳	一と	○	歴博	H-600-200-17	『記録目録』466
	27			好仁親王申文之写 寛永五除目	一枚	―			
	28	／		魚魯愚抄第二 端欠 奥少々有、正平奥書有、	一包	○	歴博	H-600-194-11	『記録目録』437
	29			魚魯 キレ／	一包	○	歴博	H-600-194-12	『記録目録』344
	追30	／		後柏原院宸翰	三枚	―			
	1	○	○	年中行事	一冊	?	歴博	H-600-771乃至 H-600-776	『記録目録』264
	2	○	○	年中行事 後醍醐院	一と	○	歴博	H-600-838	外題「年中行事 後醍醐院」「明暦」印 『記録目録』263
	3	○	○	令書聞書	一と	?			10-4に記した内の一冊に該当する可能性あり 但し10-4に「半切」とあることからすれば、10-3は「半切」本でないと考えるべきか
	4	○	○	同 半切	一と	?	歴博	H-600-1564乃至 勅封119-5	歴博本は「明暦」印（『記録目録』327）東山御文庫本は後西筆、「明暦」印
	5	○	○	日中行事 仮名 通村公筆	一冊	○	歴博	H-600-877	「明暦」印 『記録目録』290
	6	○	○	同 雅章卿筆	一と	△	歴博	H-600-954	『記録目録』328 他に「日中行事」の外題を持つ写本には東山御文庫本（勅封144-16 外題後西筆）、歴博H-600-786等あり



枝番	No	合点	書目名	員数	対応	所蔵	番号	備考
	7	〃	大槐抄	一	△	歴博	H-600-836	『記録目録』330 他に東山御文庫本（勅封113-5-6-18）もあり
	8	〃	大化抄	一	〇	歴博	H-600-783	『明暦』印 『記録目録』288
	9	〃	職原抄 注	一	〇	歴博	H-600-1008	『明暦』印 『記録目録』266の内
	10	〃	同	一	―			『記録目録』266の一冊に相当か
	11	〃	同	一	―			『記録目録』267に相当か
	12	〃	職原抄両冊全	一	―			
	13	〃	官位職 抄物	二	〇	歴博	H-600-775	『職原鈔注』 外題「官位職 抄物 上（下）」『記録目録』268
	14	〃	官職秘抄	一	―			『記録目録』275に相当か
	15	〃	同	一	―			
	16	〃	百寮訓要抄	一	〇	歴博	H-600-926	『明暦』印
	17	〃	男女官秘抄	一	〇	歴博	H-600-782	『明暦』印 『記録目録』273
	18	〃	世諺問答	一	―			
	19	〃	新儀式	二	―			『記録目録』283・284に相当か
	20	〃	行類抄	六	?	歴博 東山	H-600-191 乃至 H-600-193 乃至 勅封147-34	H-600-191は外題「靈元筆」、H-600-193は原表紙後西筆、外題「靈元筆」、『明暦』印（『記録目録』297～301）、東山勅封147-34は外題「靈元筆」
	21	〃	半切 略頌	一	―			
	1	〃	撰関補任次第	一	〇	歴博	H-600-141	『明暦』印 『記録目録』274
	2	〃	公卿補任 正保元三四	一	〇	歴博	H-600-86	『記録目録』286
	3	〃	同 寛文二年 横折	二	〇	歴博	H-600-194-4	行間補書 後西筆 『記録目録』336
	4	〃	職事補任	三	〇	歴博	H-600-798・893	『記録目録』269・270・302
	5	〃	歴名土代	二	△	歴博	H-600-745	『記録目録』260 東山御文庫本勅封129-9（外題「靈元筆」）の可能性もあり
	6	〃	廷尉佐補任	二	〇	歴博	H-600-135	外題後西筆 『明暦』印 『記録目録』261・262
	7	〃	台伝 私	一	〇	歴博	H-600-134	外題後西筆カ 『明暦』印 『記録目録』277
	8	〃	六条家 当 家略勘例	一	〇	歴博	H-600-1010	『記録目録』291
	9	〃	当 家加級雜例	一	〇	歴博	H-600-127	行間補書 『記録目録』293
	10	〃	無 外題 半切	一	〇	歴博	H-600-194-7	行間補書 『六条家加級例』 『記録目録』332

枝番	No.	合点	爪	書目名	頁数	対応	所蔵	番号	備考
11	11		○	大館家伝	一と	○	歴博	H-600-801	『記録目録』292
	12		○	元長卿記 永正四 資直仙籍事	一と	○	歴博	H-600-98	『記録目録』296
	13 抹	×		元秘抄	五と	―			
	14 抹	×		元秘別録	一と	―			
	15 抹	×		年号 改元月日	一折	―			
	16	／	○	院号定部類記	一冊	○	歴博	H-600-171	外題後西筆「明暦」印『記録目録』282
	17	／	○	東洞院殿― 親長卿筆	一枚	○	歴博	H-600-194-8	書出「一東洞院殿」端裏甘露寺親長筆『記録目録』333
	18	／	○	女院号― 大閣	一枚	○	歴博	H-600-194-9	書出「一女院号可奉称」『記録目録』335
	19	／	○	女御入内次第	一折	○	歴博	H-600-194-3	「明暦」印『記録目録』334
	20		○	大臣大饗記 仁安三	一冊	○	歴博	H-600-105	外題霊元筆『記録目録』281
	21		○	贈官位宣下記	一と	○	歴博	H-600-1509	外題後西筆『記録目録』315
11	22		○	中山内府記 長寛二年	一卷	○	歴博	H-600-245-2	『記録目録』339
	23		○	列考次第	一卷	○	歴博	H-600-29-1	「明暦」印『記録目録』338
	24		○	摂政宣下記	一枚	○	歴博	H-600-247	後西筆
	25		○	関白宣下次第	一折	○	歴博	H-600-1514	外題後西筆『記録目録』316
	26		○	准后宣下関白宣下	一冊	○	歴博	H-600-784	『記録目録』324
	27		○	参議初拝記	一冊	○	歴博	H-600-138	「明暦」印『記録目録』280
	28		○	五位藏人拝賀記	一冊	○	歴博	H-600-172	外題後西筆「明暦」印『記録目録』172
	29		○	五位藏人初拝五代之記	一冊	○	歴博	H-600-137	外題後西筆「明暦」印『記録目録』279
	30		○	越出家父其子昇進例	一枚	○	歴博	H-600-194-2	『記録目録』343
	31		○	敷政門院々号御時条々	一枚	○	歴博	H-600-194-1	書出「文安五年三月四日／敷政門院々号御時条々」『記録目録』341

本表は通封120-13-2-1-11の目録に記載される書目と東山御文庫・国立歴史民俗博物館・宮内庁書陵部・国会図書館等に蔵される現存史料との対照表である。

・「枝番」欄は通封120-13-2御本目録の枝番号を示す。右傍線はその符号を抹消していることを示す。×は書名自体を抹消したもの。

・「合点」欄は書目に付された圈点や合点等の符号を示す。

・「対応」欄の○は目録と現史料とが対応していると考えられるもの、△はその可能性が高いもの、？は対応する可能性が考えられるもの、―は対応する史料が見当たらないものを意味する。

・現存史料のタイトルが目録所載の書目名と大きく異なる場合、備考欄に参考として現存史料のタイトルを「」を付して記した。

・備考欄の「記録目録」の番号については、小倉真紀子論文の翻刻による(以下の表についても同じ)。

表三 勅封130-11-6御入記目録記載書目と現存史料との対照表

書目		現存本との対応	備考
1	行幸（靈元筆）		
1	行幸部類記 嘉承二師時卿記、康治三、安貞三灌記、達幸故実抄第三、院司公卿作法、正和三後光明照院記、	一冊	扉題後西筆
2	行幸記 永享九月廿一 花御所	一冊	外題後西筆
3	行幸記 常盤井殿、石清水社、	一冊	扉題後西筆カ
4	行幸部類記 三中記	一冊	外題後西筆
5	行幸部類記 長治二、長承四、寿永二、文永四、永仁六、乾元一、延慶三、康永三、貞和四、	一冊	扉題後西筆
6	行幸部類記 玉海	一冊	扉題後西筆
7	行幸部類記 端欠	一冊	外題後西筆
8	行幸部類記 承安五朝觀、建久元朝觀、安貞一朝觀第二度、	一冊	外題後西筆
9	行幸記 康永三園太曆、貞和四通冬卿記、	一冊	外題後西筆
10	行幸記 仮名年紀未詳、端図欠、後深草院院御代歟、	一冊	外題後西筆
11	行幸記 端云行幸年之例、	一冊	外題後西筆
12	行幸次第并記	一冊	扉題後西筆
13	朝觀行幸供奉人交名 正応二	一冊	外題後西筆
14	遷幸部類記 江記承保二、春記永承六、野記寛治七、	一冊	外題後西筆
15	御方違行幸供奉雜事 延慶二十二廿七	一冊	外題後西筆
16	関白経嗣公記 行幸記	一冊	外題後西筆
17	朝觀行幸記 宇治左府	一冊	外題後西筆
18	行幸次第	一冊	外題後西筆
19	行幸次第	一冊	外題後西筆
20	行幸次第 寛永元三廿五、関白作進	一冊	外題後西筆
21	行幸日内堅列所事 康道公筆写	一冊	外題後西筆
22	行幸 永享九	半冊	外題後西筆
23	無外題 遷幸次第	一冊	外題後西筆
24	行幸日御進退事	一冊	外題後西筆
25	御移徙行幸儀	一冊	外題後西筆
26	臨幸私記 夢窓（抹消）	一冊	外題後西筆
27	行幸留守弁帶事	一冊	外題後西筆
28	行幸行列	一冊	外題後西筆
29	来七日為御方違一	一枚	外題後西筆
30	（抹消）	一冊	外題後西筆

1		書目		現存本との対応		備考	
31	図	遷幸并内侍所渡御日時定次第同日事	一枚	叡封139-199ㇿ			
32	行幸儀	正嘉三年三月一	一	叡封139-87の内			
33	行幸儀	正嘉三年三月一	一	叡封139-83-1			後西筆「明暦」印
34	行幸行列事	行幸仙洞下御南階例事	一	叡封139-87の内			
35	行幸行列事	寛永十二九廿一	一	叡封139-87の内			
36	慶長十八年一	石清水行幸供奉人事	一	叡封139-81			
37	聚楽行幸記	行幸記 延慶二年十二月、同三年八月、	一冊	叡封139-39			扉題後西筆
38	行幸部類記	行幸記 慶安四年十一月廿二日大外記宗季記	一巻	叡封139-59			外題後西筆 室町写
39	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-53			外題後西筆 鎌倉写
40	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-62			外題後西筆 室町写
41	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-51			外題後西筆 鎌倉写
42	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-58			外題後西筆 鎌倉写
43	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-76			鎌倉末写
44	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-75-4			室町写
45	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-3ㇿ			
46	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-2ㇿ			
47	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
48	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
49	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
50	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
51	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
52	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
53	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
54	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
55	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
56	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
57	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
58	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
59	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
60	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			
61	行幸部類記	行幸部類記	一	叡封139-89-1			



		書目		現存本との対応		備考	
	1	行幸記 永享九年	一冊	叢刊139-26		外題霊元筆	
	63	行幸記 端云十七日丁卯 端欠	一卷	(不明)			
2		御幸記(霊元筆)					
	1	御幸始次第	一冊	叢刊139-33		外題後西筆	
	2	御幸次第 元弘四応永廿九	一々	叢刊139-32		外題後西筆 「明暦」印	
	3	御幸部類記 自延慶四至元応三 継塵記	一々	叢刊139-31		外題後西筆	
	4	宇治御幸記 宝治二通雅公記	一々	H-699-196		外題後西筆カ 「記録目録」480	
	5	神社御幸記 自応長元至元応三 継塵記	一々	H-699-124		外題後西筆カ 「記録目録」483	
	6	神社御幸記 保延中右記	一々	H-699-69		外題後西筆カ 「記録目録」479	
	7	新院御幸初記 公衡公記	一々	H-699-149		「記録目録」488	
	8	八幡御幸御記 弘長三、文永六、水旱震記	一々	H-699-93		外題後西筆 「記録目録」486	
	9	御幸部類記 資経卿記、実宣卿記、通雅公記歟、	一々	(不明)		「記録目録」489の一冊カ	
	10	同 端云八幡御幸次第、	一々	H-699-175		行間補書 外題霊元筆カ 「記録目録」489の内	
	11	御幸始次第 端云御幸次第、元弘四正廿九	一々	H-699-778		外題後西筆カ 「記録目録」481	
	12	無外題 日次事	一々	叢刊139-21			
	13	御幸記 八幡御幸記、水旱震記、弘長三、文永六、同、水旱震記、文永十一御幸始記、	一々	H-699-779		外題後西筆カ 「記録目録」487	
	14	春日御幸次第	一々	叢刊139-59		外題後西筆	
	15	御幸始次第	一折	叢刊139-49カ		外題後西筆	
	16	八幡御幸次第(抹消)	一卷	-			
	17	端云右大臣宗忠記云一	一々	叢刊139-64			
	18	端云権中納言頼資一	一々	叢刊139-55			
	19	端云中右記云天永二年一	一々	叢刊139-73カ		包紙霊元筆	
	20	端云中右記云長承四年一	一々	叢刊139-52			
	21	御幸次第 貞和五年端欠	一折	叢刊139-46		外題霊元筆	
	22	八幡御幸次第 応永廿九	一卷	叢刊139-68		外題後西筆 室町写	
	23	御幸始次第	一卷	(不明)		「記録目録」504カ	
	24	院御幸次第	一々	叢刊139-69		外題後西筆 室町写 「明暦」印	
	25	御幸始部類記 資経卿記	一々	叢刊139-66カ		外題後西筆 鎌倉写	
	26	御幸始時両惣官参勤例	一々	叢刊139-75-3		室町写	
	27	実躬卿記	一々	叢刊139-75-1		室町末写	
	28	院中執事以下事 端云□□	一々	叢刊139-57カ		室町写	

書目		現存本との対応		備考	
29	御幸御教書 端云来廿八日、 新加古	一	巻封139-75-5	室町写	
30	端云御隨身左将曹一 新加	一枚	巻封139-79	室町写	
31	端云賀已在興後、 殿上人一 新加	一枚	巻封139-75-2	室町写	
32	熊野御幸記 新加	一卷	巻封139-65	外題霊元筆	
33	行幸記并御幸 新加	一冊	(不明)	あるいはH-600-110カ(外題後西筆『記録目録』482)	
34	仙洞禁中御幸始 慶安四 新加	一卷	巻封139-79	外題霊元筆	
35	慶安四年良仁親王行啓次第 新加	一折	巻封139-91	霊元筆カ	
36	新院御所御移徙新殿御幸行列 新加	一	巻封139-96		
37	親王渡御行列 寛文三 新加	一	巻封139-92		
38	新院御幸于禁闕行列 寛文三二六 新加	一	巻封139-95		
39	新院御幸并法皇行列 寛文三二一 新加	一	巻封139-94		
40	臨幸私記 夢想写 貞和二年 新加	一卷	巻封139-67	外題後西筆	
41	石清水御幸同社御幸八幡御幸 新加	一冊	巻封139-34カ	外題霊元筆	
42	御幸始部類記 新加	一冊	H-699-789	外題霊元筆カ『記録目録』490	
○					
4					
1	頼親卿記 賀茂御幸 一冊	一冊	巻封139-39	外題後西筆	
2	御幸記 弘安、正応、康永、 一	一	巻封139-37	外題後西筆	
3	御幸記 賀茂 一	一	巻封139-35	外題後西筆	
4	御幸記 鴨 一	一	巻封139-36	外題後西筆	
5	御幸記 八幡 一	一	巻封139-38	外題後西筆	
5					
5					
1	行幸(校町筆) 一包	一包	巻封139-82カ		
2	石清水行幸次第 一結	一結	巻封139-72カ		
3	右新加 一結五 等カ	一結五 等カ	巻封139-84-86、93		
4	寛永記 甲乙/康道記 二卷	二卷	巻封157-59カ		
5	日野大納言光平トアル一封		巻封139-99		

6				5	
御幸 一合（桜町筆）				右新加、	書目
1	東宮行啓始行列	天和三年二月十六日	半	一冊	勅封139-97-1
2	東宮内裏渡御行啓行列	貞享四年正月十八年	半	同	勅封139-97-2
3	東宮行啓始行列	宝永五年二月廿四日	半	同	勅封139-97-3
4	後深草院御記	弘長元年十二月	一卷	勅封139-56	外題後西筆
右一括新加、					

（注） 2 御入記目録の内、 3 不足目録に掲載される史料については○を付した。

---

## A Study on the Constructing Process of the *Takamatsu-no-miya* Library Collection

OGURA Shigeji

This paper clarifies the process by which the compilations of Emperor *Gosai*, who copied various good manuscripts and compiled old manuscripts in early modern times, were passed on to Emperor *Reigen*, Emperor *Nakamikado* and Imperial Prince *Arisugawa-no-miya Yorihito*. Upon receiving the order from Cloistered Emperor *Gomizunoo* in 1666, the Retired Emperor *Gosai* presented 70 boxes of various newly manuscripts to Emperor *Reigen*, not including old manuscripts or literatures, which were left to Retired Emperor *Gosai*. The Library Collection of Retired Emperor *Gosai*, which also included these manuscripts, was confiscated by Emperor *Reigen* after the death of Retired Emperor *Gosai* in 1685, and Emperor *Reigen* further rearranged the manuscripts before incorporating them into his own library. Moreover, parts of the Library Collection of Retired Emperor *Gosai* were given to people such as Imperial Prince *Yukihito* and *Konoe Motohiro*. As for the reason why Emperor *Gosai* produced copies of Imperial Palace books, up until now it had been thought that copies were made as a precaution in case of fire at the Imperial Palace. Now, however, we understand that Emperor *Gosai* made these copies to increase his own personal library for preservation even after his abdication, and books other than those which were presented to Emperor *Reigen* were, with some exceptions, ultimately intended to be handed over to Imperial Prince *Yukihito* (or Imperial Prince *Hachijo-no-miya Naohito*). After confiscating the Old Library Collection of Retired Emperor *Gosai*, Emperor *Reigen* classified historical books in addition to the books presented to the Retired Emperor *Gosai* in 1666, but this was then handed over to Emperor Higashiyama five years after Emperor *Gosai's* abdication without the work having been completed (incomplete parts were left out). Even after that, however, boxes were returned from the Imperial Palace and books were recovered as necessary. On the other hand, literature books continued to be managed at the Sento (the Imperial Palace Retired Emperor *Reigen*) without change even after the abdication. Following the death of Cloistered Emperor *Reigen*, a huge quantity of historical and literature books were conferred to Emperor *Nakamikado*, including items that had been separated from the Old Library Collection of Retired Emperor *Gosai* as well as newly acquired books from Emperor *Reigen*, among which were also items that had been presented to Emperor *Nakamikado* after having been temporarily distributed as mementos to Imperial Princes and Princesses. Books were given to Imperial Prince *Arisugawa-no-miya Yorihito* between 1727 and 1729, and again after his death. These books included items intentionally selected by Cloistered Emperor *Reigen* as gifts for Imperial Prince *Yorihito*, and, after his death, items that came into the hands of Imperial Prince *Yorihito* by chance.

Key words: *Takamatsu-no-miya* Library Collection, *Higashiyama* Library Collection, Emperor *Gosai*, Emperor *Reigen*, book catalogs

---